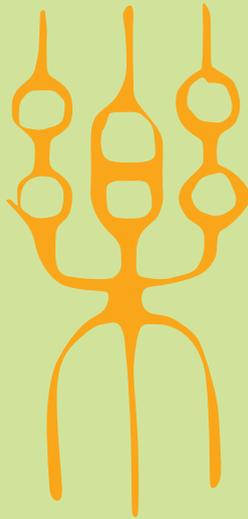
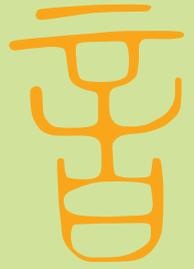


京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター
所報

第11号 2010年6月



Newsletter
of the
Research Centre for Japanese Traditional Music
Kyoto City University of Arts

No.11 June 2010

目 次

| | | |
|--------------------------------|-------|----|
| 所長対談 音資料の発信者・藤本草氏に聞く | 久保田敏子 | 3 |
| でんおんエッセイ 町田佳聲のこと | 山田智恵子 | 21 |
| 研究レポート1 プロジェクト研究・共同研究の報告 | | 23 |
| 2 非常勤講師の研究報告 | | 30 |
| 催事レポート1 公開講座 | | 38 |
| 2 でんおん連続講座 | | 43 |
| 3 伝音セミナー | | 45 |
| 専任教員の活動報告 | | 48 |
| 彙 報 | | 60 |
| 日本伝統音楽研究センター概要 | | 62 |

所長対談

音資料の発信者・^{ふじもとそう}藤本草氏に聞く

聞き手・構成：久保田 ^{くぼた} ^{きとこ}敏子

日時：2010年2月18日（木曜日）

場所：京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター所長室
(記録補助：竹内有一、斎藤尚)

久保田 今日のご遠方の所、お運び下さいまして有難うございます。今日は、ビクターが基金元になっています財団法人日本伝統文化振興財団の理事長でいらっしゃる藤本草様をお迎えして、＜音楽産業における伝統音楽への取組＞などについて、色々とお話を伺いたいと思います。よろしく願います。まずは、藤本様に自己紹介をお願いします。

藤本 私は学生時代には伝統文化の方にはあまり関係なく過ごしてきましたが、卒業後日本ビクターに入社して、レコード部門のビクター音楽産業に配属されました。少し営業などにも携わった後、学芸部という伝統音楽を含む音楽とか教育などを専門とする制作のセクションに配属が決って、1～2年は色々させられていました。そのうち次第に伝統音楽関係の仕事が多くなり、やがて日本の伝統音楽や世界の民族音楽、それにクラシックなどの制作が専門のようになって参りました。そんな仕事を続けておりましたところ、平成15(2003)年に「振興財団」の現職に就く

こととなりました。

久保田 当時は確か「ビクター」という社名が付いていましたね。ビクターという名前が取れたのには何か訳があったのでしょうか。

「ビクター」から「日本」へ

藤本 はい、当時は「ビクター伝統文化振興財団」という名前でした。SP盤からアナログのテープなどを含めて、死蔵されているものが多く、それらをレコード会社にこだわらずに広く収集し、発売という形でなくても世に広く公開していこう、というのが設立目的の一つでした。SP時代からの音源を所蔵している会社はビクターの他に大きく5社ありまして、一番古いのはコロムビアで、今年2010年で創立100周年になります。そして、キングレコード、東芝、テイチク、あとポリドールは会社の形が変わり、SP盤の音源は無いことになっています。そういった所の音源を借りようとしますと、我々は文部科学省、文化庁管轄の財団法人ですので、ピク

ターという名前が付いていまして実際の法人格は別なのですが、音源を活用していくにはビクターという名前がない方が各会社や団体、個人の方に至るまで広く音源のご提供を頂けるのではないかということになりました。幸い、基金元のビクターでも理解を示してくれましたので、私の代になってから文化庁の方に願い出て、ちょっと烏辭がましいのですが「日本伝統文化振興財団」に改名したような次第です。

久保田 ビクターさんとしては大英断で結果は良かったんでしょうけど、大きな名前だけに、執着もあったのでは、と外野席からは思うのですが…

藤本 確かに、この財団を立ち上げた頃を知っている思い入れのある方々からは、例えばポーラ伝統文化振興財団のように会社のメセナ部門として企業の

名前を前面に出して欲しいといった声もありましたが、企業名を外したお陰で、音源もこれまで以上に広くご提供頂きまして、ずいぶん良い仕事をさせて頂くことができました。結果的には良かったと思いますね。ただ「日本伝統文化振興財団」の名前と似たような名前の財団が20か30あるのでちょっと解りにくくなったという点も否めませんね。時には通信販売の会社と間違われたりもするんですよ（笑）。

久保田 ところで、理事長さんは藤本様で何代目ですか。

藤本 理事長は私で三代目です。初代は波多一索さん、二代は黒河内茂さんでした。

久保田 黒河内様は、私ども日本伝統音楽研究センターが平成16・17年度に実施していました「日本伝統音楽に関す



藤本草 (ふじもと そう)

1950年8月生、東京都出身。青山学院大学経営学部卒業。1976年、日本ビクター株式会社入社。以後現在まで、日本の古典音楽・民俗芸能、世界の民族音楽、クラシック音楽の音楽・映像制作プロデュースを行う。2003年6月より、財団法人日本伝統文化振興財団理事長。現在、邦楽関係では、NPO法人日本尺八協会理事。歴史的音盤アーカイブ推進協議会副代表幹事、東京邦楽コンクール審査委員長等を務めている。

主なプロデュース作品：「アジア伝統芸能の交流」LP3枚、1979。「箏曲阿部桂子全集」LP10枚、1981。「箏曲米川敏子全集」LP10枚、1983。「JVCワールドサウンズ・シリーズ」世界の民族音楽CD全150曲、1985～2000。「聴流-初代越野栄松名演集」LP4枚、1983、芸術祭優秀賞。「銅鐸」「縄文鼓」「サヌカイト」土取利行、CD、1982～1987。「箏曲地歌大系」平野健次監修、CD60枚、1987。「宮城道雄作品全集」CD13枚、1993。「アイヌ神話集成」CD10枚・ビデオ1巻・書籍10冊組、1998、毎日出版文化賞・芸術祭賞。「阿吽の音」声明四人の会、CD、1999。「キリスト教音楽の歴史」CD50枚、2001、音楽之友社レコード・アカデミー賞。「琉球古典音楽集成」CD2枚、2001、芸術祭優秀賞受賞。「新訂復刻ウエベケレ集大成」(アイヌの昔噺) CD2枚・書籍、2005。「虚無僧尺八の世界」CD、2005、芸術祭優秀賞。「CD & DVD版洋楽渡来考」CD3枚、DVD1枚・書籍、2006。「日本伝統音楽演奏家名鑑」書籍530頁、2006。「山本東次郎家の狂言」DVD10枚・書籍、2007。「肥後の琵琶弾き山鹿良之の世界」CD3枚、2007、芸術祭優秀賞。「SP音源復刻盤 信時潔作品集」CD6枚・書籍、2008、芸術祭大賞。「人間国宝 女流義太夫竹本駒之助の世界」CD11枚、芸術祭優秀賞。

る歴史的音源の発掘と資料化」という共同研究のメンバーとしてご協力頂きました。ところで、振興財団の主なお仕事は何でしょうか。

藤本 日本の伝統音楽のアーカイブ、つまり古くからの音源の記録保存と、現代の演奏家の演奏の記録保存、伝承者の育成ということを柱に、そこに付随します様々な教育関係とか、文化関係の音と映像を制作しながら細々とやっております。

久保田 藤本様は大学時代、何を専攻されていたんですか。

藤本 青山学院大学の経営学部、いわゆる商学部ですね。高校時代から合唱を熱心にやっていたので、大学でも合唱団に入るのが第一の目的でした。ところが、憧れていた男声合唱が青山学院には無いのがわかりましたが、それでも非常に歴史のあるグリーンハーモニー合唱団というのに入部しました。4年間はほとんどそこでした。

久保田 商学部ではなく合唱楽部ですね(笑)。ところでお父様は有名な詩人でいらっしゃるんですよね。

藤本 はい、野上彰^{*1}というペンネーム

でした。去年（2009）がちょうど生誕百年でした。徳島の出身で、京大、東大を中退した後は、囲碁が得意だったので、それで生活していたようでした。戦後「火の会」という前衛的な芸術運動を立ち上げて活動し、やがて、詩や戯曲、小説などをメディアに発表するようになりました。昭和42（1967）年、私が17歳の時に亡くなりました。もうちょっと長生きしていたら色々な話を聴けたんでしょうが…。父は、当時の文人の典型のような人で、家には全く居なかったのが、作家らしい姿の記憶はあんまりありません。

久保田 野上先生と言えば「昔々よ北の果て、オーロラの灯の燃えている～」というバラードのような「子守唄」が有名ですね。

藤本 あれは私の子守唄だったんですよ。私は5人兄弟の長男ですが、父はそれぞれが誕生したときにオリジナルの子守唄を作って贈ってくれていました。私の子守唄はNHKの「婦人の時間」の依頼で、昭和26年に團伊玖磨^{*2}さんが作曲されました。この曲が一番良く知られていますが、姉や弟は自分の子守唄のほうが良いと言っています（笑）。私は父が死んで大分経ってからの入社だったんですが、團さんを始めかつて父と仕事の繋がりがあった中田喜直^{*3}さん、大中恩^{*4}さんなどの作曲家の方々と録音の仕事ができるようになった時には、ずいぶんと優しくして頂きました。

レコード制作を振り返って

久保田 録音と言えば、何か興味深いお話はありますか？

藤本 そうですね。ジャンルが多岐に亘っていますのでね。確か一番最初にやらせてもらった仕事は、日本音楽集団^{*5}にいらした頃の野坂恵子^{*6}先生と宮田耕八郎^{*7}先生の「楽しいお箏の稽古」のようなLPレコード作りでしたね。メソッドは誰方が書かれたのかは判りませんが、旧来の、例えば宮城先生の「小曲集」^{*8}の様な曲から入るのではなくて、もう少し、当時の感覚で現代的なものから入るといったものでしたね。可愛い小曲で、簡単な五線譜が付いていたのを覚えています。ただ、私が企画した物でなく、させて頂いた仕事でしたので、今はもう手許に現物が無いのが残念です。

久保田 私は存じませんでした。野坂先生のお宅にあるでしょうかね。

藤本 多分お持ちではないかと思います。

久保田 その後、私も色々とお手伝いさせて頂いたのですが、平野健次^{*9}先生が次々と出されたシリーズは、入門モノであっても学術的に評価の高いものでしたね。

藤本 たしか東芝からでしたね。今では出来ない立派な仕事で、しっかりした解説書も付いていて私も良く利用していました。

その後ウニャ・ラモス^{*10}という南米のケーナの奏者が来日した時、レコードを作る機会がありまして、相談の結

果「春の海」をケーナで演ろうということになりました、砂崎知子^{*11}さんのお箏と録音しました。

久保田 そういえば、その頃でしょうか、1970年頃からワールドミュージックがブームになっていましたよね。ケーナもブームになって「コンドルは飛んでゆく」なんかは爆発的な人気があって、誰でも知っていましたよ。

藤本 そうなんです。丁度その走りの頃でした。その時、後に「台湾高砂族の音楽」などの芸術祭参加LPアルバムを制作された藤本壽一^{*12}さんが編曲を手掛けて下さって知己になりましたので、その後、岸邊成雄^{*13}先生の監修で『世界民族音楽全集』を作ることに繋がりました。

久保田 結構沢山の仕事をこなしてこられましたね。

藤本 はい、一年に200枚もの編成表を書いたことがありました。結構多産系でして(笑)。

久保田 しかも和洋に亘ってですからすごいですね。

藤本 どちらかという「和」の方が専門だったんです。最初に邦楽の全集をやらせていただいたのは『阿部桂子^{*14}全集』でした。その前に吉川英史^{*15}先生監修の『箏曲と地唄の歴史』というシリーズの中に多く収録されていた阿部先生の曲をもっと纏めるべきだという平野健次先生からのお声掛けりで監修もして頂きました。当時はビクターも余裕がありましたので、半分ほど新録を入れて2年程かけて完成しました。

当時はまだお元気だった小林玉枝^{*16}先生、井上道子^{*17}先生に加えて、中能島欣一^{*18}先生、宮城喜代子^{*19}先生といった他派他流の助演の方にも入って頂いて、LP10枚組を解説書付きで出しました。これが、後々私のメインの仕事の一つとなります箏曲地歌関係の最初の仕事でした。

それに続いて、高橋榮清^{*20}先生、米川敏子^{*21}先生、島原帆山^{*22}先生、宮城喜代子先生、大阪の須山知行^{*23}・中島警子知行^{*24}先生などの全集でした。

久保田 いずれも素晴らしい先生方のアルバムですね。しかも、どれもが書籍として出せるような立派な学術的解説書が付いまして、私も平野先生のお手伝いをさせて頂いて、大いに勉強させて頂きました。

藤本 今はもういらっしやらない名人の演奏で、とても貴重な音盤です。それらに併行するような形で、都山流尺八の全集も手掛けました。ピース物でしたが、協会^{*25}も楽会^{*26}の方も10枚、15枚という大きなシリーズでした。

少し話が飛びますが、こうした下地が、昭和62(1987)年、ビクターの60周年に出した『箏曲地歌大系』LP60枚220曲という仕事に繋がったわけです。

久保田 あの頃、私は竹本津大夫^{*27}師匠に義太夫のお稽古を受けていまして、平野先生たちと大夫の芸話の聞き書きもしておりましたので、『大系』の題字の揮毫を師匠にお願いしました。

藤本 そうでしたね。懐かしいです。完成まで都合3年ほどかかりました。同

じ頃、平野先生監修のアーカイブで3枚組の『三世荒木古童^{*28}・福田栄香^{*29}名演集』とか4枚組の『吉田晴風^{*30}全集』と、あと、岸邊先生監修で『聴流～初代越野栄松^{*31}名演集』LP4枚組なども出しました。

面白かったのは『ベスト何とか』というシリーズです。『現代の箏曲ベスト30』はじめ『箏曲の古典』、『尺八』、『三弦』とか出しました。

当時私の家と平野健次先生のお宅とが近かったので、私が何か企画を思いつきますと、先生は夜が遅くていらっしやっただので、時間を厭わずに帰りにお寄りしてお話しました。すると「おお、それは面白いナ」ということで、早速、ご愛用のワープロ、シャープの書院で、左手で煙草をふかしながら、右手の人差指一本で打つんですよ。そうやって私が思いついたことが、瞬く間に美事な企画書になるんですから、凄かったですよ。で、私は、それを自分なりに纏め直して会社に出しまして、発売日とかを決めて決済を取り付けました。実績のある先生の企画ですから、もちろんすぐにOKができました。そこまでは良かったんですが、原稿がなかなか出来てこないんです。先ほど申し上げた全集のほとんどが平野先生でしたので、溜まってきますと大変でした。「平野先生のは原稿が全部入ってから編成しろ！」って、編成課の上司からしょっちゅう叱られました。

久保田 平野先生のは原稿はとっても緻密なんですけど、遅いので有名でしたね。そ

の頃になりますと、私たち弟子にも分担当が次々回って来たのですが、書き上げてお渡ししても暫くは袋に入ったまま、机の横に積んであって、中々ご覧頂けませんでした。ハラハラして、申し上げても「いいんだよ、奴らはどうせサバ読んでやがるから」と平然とされていました。でも、先生がご立派だった点は、お手伝いさせて頂くと、必ず名前を出して下さった点です。

藤本 ずいぶんハラハラしたのですが、今から考えると、あの頃の企画は本当に録音しておいてよかったと思います。

久保田 錚錚たるメンバーの、本当に貴重な実録ですものね。今、私共の研究センターでも、アーカイブに力を注いでいまして、SPのデジタル化の次には廃盤になっているLPに取りかかりたいと計画中ですが、御社では、そうした音盤のCD復刻はされないのでしょうか。

藤本 一部を除いてまだですね。『箏曲地歌体系』はCD化しましたが、『阿部桂子全集』のほとんどの曲目を助演された藤井久仁江^{*14}先生がまだ国宝になれるだいぶ前の録音ですが、その久仁江先生のCD全集がコロムビアから何度も出ましたのに、阿部先生のは未だCD化はしていません。ただ、企んだ訳では無いのですが、阿部先生の全集には竹(尺八)の入っていない曲が多かったんです。ひよんなことから判ったのですが尺八の先生方、特に琴古流の方はあのレコードを、三曲合奏の練習台に好んでお使い下さっていると

いうのですね。

久保田 カラオケですね。以前ステレオの片チャンネルを消して合奏練習されていた人もいらっしゃいましたよ。

藤本 ただ、マイナスイオンで右と左とがちゃんと分けてあれば出来るんですが、普通はカブリと言って自然に入ってしまう音がどうしても残ります。いずれは、CD化の需要も出てくると思いますね。

こうした邦楽の仕事も、私が制作の仕事になってから10年ちょっとでした。私の制作数があまりにも多く、粗製ではないと思っていましたが、濫造が過ぎるということだったのでしょうか、上司から、「暫く別の仕事をしないか」と言われました。それ以前にやらせて頂いた小泉文夫^{*32}先生の『アジア伝統芸能の交流』という、年に一度か隔年に一度行われていた国際交流基金主催の民族芸能の祭典での仕事の経験から、そちらの方面にも興味を持っていて、折から昭和60年代からCDの時代に入りましたので、ビクターの持っていた音源を集めて『世界の民族音楽』のCD制作を始めたところ非常に評判がよかったので、その後、体裁を変えて『JVC World Sounds』という名で、結局CD150枚となるシリーズを出し始めました。

アコースティックな響きを録る

久保田 あのシリーズは素晴らしいですね。録音に向向かれたのですか。

藤本 もちろん世界中色々な所へ出向いて現地録音したものもありますし、依頼したものもあり、7~8年かけて制作しました。

今は日本の伝統音楽の仕事に戻りましたが、そこで思ったことは、世界中の民族の固有の伝承された芸の本質は変わらないということですね。日本の楽器で言えばサワリといった、とてもアコースティックな響き、固有の響きや言葉がすごく生かされていますので、それをどのように収録して世の中に出すかというレコード・プロデューサーとしての仕事には、それ迄に日本の音楽をやっていたことが役立ちました。

民族音楽でも電氣的に楽器の音を増幅したりするジャンルは苦手なんですが、中国や韓国、モンゴル、インドネシア、インドなどのアジアの国々、西洋のグレゴリオ聖歌、あるいは、少数民族のイスラームとかアメリカインディアンなどの様々なナマの音を現場で聞いて録音したことと、日本の伝統音楽に接していた経験とは、自分の中で繋がっていますね。

久保田 邦楽の録音で何か特別なことがございますか？

藤本 久保田先生もご存知の服部文雄さんという先輩と一緒に長く仕事をさせて頂いて、自分の「耳」を拓いて貰ったことでしょうかね。

久保田 あの方、とっても耳の良い方ですね。

藤本 本当に信頼のおけるエンジニアです。邦楽の音というのは洋楽のマイク

では録り切れないものがあるんです。例えば今有名なマイクロフォンには、ヨーロッパ製のノイマンやショッパスなどがありますが、よくよく考えますと、このマイクはバイオリンを録ろうとか、ソプラノの声を録ろうとか、何かをシミュレーションして作られているように思うんです。

ところが日本では、例えば三味線などに特化されたマイクは開発されていません。服部さんと三味線を録るときには、昔のNHKの放送に出てくるような編目の大きい、振動板のすごく大きいRCAの77DXリボンマイクを使っています。私の年齢よりもずっと古い物です。

お箏の収録の場合にはドイツのノイマンのM49という今ではもう骨董品のマイクを使います。ビクターはメンテナンスがとても良いので、ビクターのスタジオですと、それらが使えます。

久保田 どの辺が違うんですか？

藤本 今はコンデンサーマイクが主流でして、電気的な特性で見ますとフラットで広帯域な利点もあるのですが、三味線のパチンというアタックから減衰の早い余韻まで録ろうとすると、弱くなったところが録り切れないのです。それに比べてリボンマイクですと、聴いた時の音に近い自然な音で録れるんですよ。ただ、残念なことですが、今そのマイクを修繕出来る人がいなくなっただけです。

久保田 昔はよく録音の編集に立ち会ったのですが、長い磁気テープを切り貼

りしてしまして、不要になったテープを貰い受けてメンディングテープで貼って家で再利用したものです。

藤本 あれは経年変化で剥がれ易くなりますから、今でもそういう古い再生テープを早回ししますとパンと切れるんです。切れるのは仕方ないのですがカビの胞子が飛び散ります（笑）。先日も2日間ほど作業をしていましたら気管がおかしくなりました。

今ではテープではなくコンピュータで編集します。先輩から聞いたアナログ録音時代の面白い話があるんですよ。その日の録音は2テイクだけ録って、良い部分だけ繋いで編集しようということになったそうです。良いところ取りで繋ぐんですから、当然片方には悪いものばかりで繋がったものが残るわけです。発売になってから、演奏者が恐縮して「どうも今回は悪い演奏ですみません」と謝られるので、そんなはずは無いと思って調べたら、悪いテイクを集めた方で発売してしまった、という話でした。

理想的な録音メディアは？

久保田 ところで、録音機器が今色々ありますが、どういうのが理想なんでしょうか。

藤本 そうですね。SP盤のすごく良い再生音をお聞きになったことがおありでしょうか。先日、札幌から2時間半程バスで行った道東の新冠町立レ・コード館という所へ行ってきましたら、紙

製ラップの蓄音機がありまして、本当に驚くほど良い音なんです。恐らくSP盤の最高期、昭和30年代の終わり頃の録音再生技術は、初期のテープ録音よりも音が良かったように思います。昭和60年代にはデジタル録音に段々変わって行くのですが、まだアナログ録音が続いていた昭和60年代終わり頃のアナログレコード技術は最高だったと思います。デジタル技術もCDが始まった昭和60年代に比べますと、ここ10年で断然よくなりました。

今の先生の「どんな録音手段が良いのか」というご質問に、即お答えするとすれば、今は当然デジタル録音、コンピュータを使ったハードディスクレコーディングが主流といえますね。

久保田 個人もさることながら私共のような機関としましては、どういう手段で音を残すのが将来性ということでベストなのか、という悩みが尽きないのです。現在はCDに移して残しているのですが、それも寿命が云々されていますし、つい先頃まではラジオ放送などの出演記録はDATで頂いたのですが、今はもう販売中止です。MDもコンパクトで便利ですが、過渡期的な商品と言われているし、ハードディスクもある日突然壊れる危険性がありますし、困っています。

藤本 そうですね。難しい問題ですね。冗談みたいですが、100年過ぎてても再生可能なSP盤が、実証的に一番長持ちするという話もありますね。(笑) つまり、レコードのように「刻んで」ある

ものは強いですね。今なら光学的に焼いた物ではなくプレスしたCD盤が一番安全かもしれません。

久保田 今、市販のCDはどれ位の耐久性があるのでしょうか。

藤本 一応、半永久的と言われていますが、果たして「半」がどの位なのでしょうかね。

久保田 半分だけだったりして(笑)

藤本 誰も検証したことはないのですが、CD-R等は長持ちしないでしょうね。日の光に曝すとダメになります。古いCD-Rが読めなくなった事例は幾つもあります。もしもダメになれば、対策の仕様もない状態です。

久保田 最近のレコードメーカーさんでは、どんな方法でデータを保管されていますか。

藤本 ハードディスクに残しているのですが、壊れますとブラックボックスですから中身が全く判らなくなって取り出せなくなりますので不安で仕方ありません。業界では、ミラーリングシステムと言って、常に鏡のように複数を保管し合って監視して、欠損があったら直して行くという方法ですね。

あとはテープメディアですね。テープは今は一般的ではありませんが、テープにデジタルのデータを入れるというDATのお化けみたいなものもあります。実際には技術の進歩との競争なんですよね。事情は映像の世界でも一緒です。ビデオの機械が開発されてから10世代くらい機械が進歩して代わっています。テープも大きい1吋テープか

ら、2分の1テープ、弁当箱のような4分の3テープ、業務用のベータテープ、次はそれがデジタルになって、次はD2のテープと、どんどん変わっています。問題は古いフォーマットの再生です。古い機械もメンテナンスが出来なくなると壊れたのと一緒にですから、困ったことです。レコードメーカーでも様々なマスターテープを使って来ました。これ迄は、カッティングプレスに送るのはテープメディアだったのですが、今ではミラーリングしたデータを入れるタンス大の倉庫のような機械に保管しながら、アメリカ生まれのDDPというフォーマットをオンラインでデータ送信することになりました。

久保田 デジタル送信で、低音や高音といった音域は大丈夫なんしょうか。

藤本 圧縮した家庭用のものとは違って、リニアPCMの16ビットあるいは24ビットという真っ直ぐな信号音ですので全く問題ありません。

今この話題をもう少し踏み込みますと、CDというのはソニー、フィリップスが決めた規格で、よく言われるようにカラヤンの「第九」が充分に入る75分、あるいは80分とかの収録可能時間です。音質に関してのフォーマットは44.1KHzというサンプリング周波数で16ビットに決めてしまったんですね。当時は入れ物がCDしかなかったので、それでも画期的だったんですが、今ではスペック（特性）として足りないんですよ。今や録音時のサンプリング周波数は192 KHzという、音としては

CDの2.5倍位高い所まで入りますし、ビット数といういかに細かく音を分けるかということも24ビットに拡大されています。技術は日進月歩進化していますが、そういう中であってCDというメディアがいまだに使われています。これから一体どうなっていくのかは、本当の所まだ判らないんじゃないでしょうか。

レコード業界の現状と課題

久保田 最近、景気の低迷が続いていますが、レコード業界は如何ですか？

藤本 景気の低迷もさることながら、一つには音楽を聴く形が大きく変わってきています。音楽を聴く楽しみは、レコード発明以前の100年前は現場に行った人だけのものでしたが、家に居ながらも楽しめるようにレコードなどのメディアが発展してきたわけです。ところが、今ではコンピュータのあるのが当たり前で、簡単にダウンロードして聴けてしまいます。それでもきちんとお金が取ればメディアが代わっただけで良かったのですが、今の若い世代の人たちには「音楽にはお金がかからないものだ」という観念があるように思えてなりません。

久保田 この頃の若者のコンピュータ技術は驚くほど進展していますので、発売されたばかりの音でも映像でも、簡単に、無料で手に入れるようですね。若者に言わせると、それが常識なんだそうで、著作権も隣接権も全く知っ

たこっちゃ無いという状態です。

藤本 冷静に考えれば「聞きたいものが何時でも、誰でも聞ける」というのが本質的な形なのかもしれませんが、音楽を作る側はこうした違法コピーが大問題なんです。出来上がった音楽作品が購入され収入になって、それを原資に再投資して、次の制作ができます。こうしたサイクルが、今や世界中で崩れてきているんです。違法なコピーやダウンロードが何故悪い事なのかというのを若い世代や子供たちにどうやって教育していくか、ということが、音楽の制作に携わるものにとって最も大きな課題です。

久保田 映像でも書類でもガードが掛かっているものがありますが、CDでも出せばどうでしょうか。

藤本 実は一時、コピーできないCDを発売したことがありましたが、非常に評判が悪かったんです。というのは、自分の為にだけならコピーすることは法律的にも許されていますが、自分のiPodにコピーして楽しむことが出来ないわけですから、上手く行かなかったんです。

将来、市場が店頭ではなくダウンロード等に大きく移行してしまうと、我々が今携わっています伝統音楽の分野などは、市場から消えてしまう可能性もあるわけです。と申しますのは、伝統音楽の愛好家はダウンロードには興味のない方が多く、従来のレコード店などを通じた流通ビジネスがダメになったとしますと、我々としては、伝統音

楽を必要とされる人達に届ける術がなくなるわけです。

久保田 今ですら、レコード店の邦楽コーナーに行きますとほとんどが歌謡曲で、僅かに民謡がある程度ですよ。

藤本 そうした意味では、従来のレコードビジネスは曲がり角、或いは言いたくないですが斜陽産業になりつつあります。レコードメーカー全社が作っている社団法人では、違法コピーが如何に皆さんの楽しむ音楽作りを阻害しているかという啓蒙活動をだいぶ以前から始めています。

久保田 そういう違法なルートを遮断できないんでしょうかね。

藤本 難しいでしょうね。コンピュータウイルスは、ウイルスをバスターする会社がつくっているんじゃないかという冗談もありますが(笑)、違法な音楽サイトは誰が何の為に作っているのかという微妙な問題ですね。自分の技術を見せて満足したり、面白がったりする人がいるのと同じで、発売されたものをいち早く手に入れて自分の所からオープンするといったのは、ちょっとしたゲーム感覚なんでしょうね。ただ、それを商売でやっている大規模な違法サイトならば摘発できるんですが、個人で無償でやっているサイトを、利用者がインターネットですぐ探し出せて気軽に取り込めるんですから、現状お手上げ状態じゃないでしょうか。

伝統音楽や民族音楽などは昔からさほど売れていないから、そんなに需要が変わらないんじゃないかと、少し楽

観論を言う人もいます。でも、実感として、3分の1から5分の1に減っていますね。例えば、以前だったら3000枚位は出るかなと思う物でも今なら7～800枚、1000枚は売れるだろうと思っただ物は2～300枚です。

久保田 そうなんですか。ヒット曲などは何百万枚売れた、などとよく聞きまして、邦楽の側からは羨ましいと思っていました。

藤本 いや。今はもう無いですね。去年1年間で百万枚超えたアルバムは2枚です。これまで最も多く売れた1999年の宇多田ヒカルさんのアルバムは800万枚を超えました。1981年からの30年間に日本で100万枚を超える売り上げのCDアルバムは合計約270枚ありますが、2005年以降の5年間に発売されたものはわずか20枚しかありません。流行っているようでいて結局はコピーの問題が大きく影響しているようですね。勿論、携帯用に一曲100円とか200円とかで健全にダウンロードできるビジネスはあるんですが。

伝統文化振興財団という立場では、例えば珍しい地歌の曲などがそこへ行けば聞けるというサイトがあればいいと思うんですけど、登場しないんですね。

文化庁・関係機関との連携

久保田 ところで、私も少し参加させて頂いてます文化庁のSPレコード調査というのはどういう状況にあるんでしょ

うか。

藤本 そもそも遡れば、歴史的音盤アーカイブ推進協議会（HiRAC／ハイラック）が4年前に立ち上がりましたが、それに先立つ今から6年前に、私は現職になりました。いろいろ調べてみると、古いSP録音原盤に関してはレコードメーカーは費用の点もあってデジタル化や資料化に全く手付かずで、このままでは貴重な音源資料が無くなる恐れがありました。また例えば、「これは伊十郎*³³だよ」とか「中能島*¹⁸先生だよ」とか聞いて判る人も居なくなると、来歴のはっきりしない音源が何であるか全く判らない時代が早晚きます。少しでも早くデジタルアーカイブ化を行わなければダメだ思うようになりました。そこで、レコード各社、文化庁などに働きかけて、歴史的音盤、要するに音楽資料の調査研究を2年間行って頂きました。それを受けて設立された歴史的音盤アーカイブ推進協議会に参加した日本レコード協会、日本音楽著作権協会、芸団協、NHK、映像産業振興機構と私共財団の六社で2年間にわたる協議を進めた結果、昨年度から国会図書館に納品が始まったところです。このSPレコードのデジタルアーカイブ事業は、現存するレコード会社の音源だけなんですけど、実はそれ以外にも廃業してしまったレコードメーカーもたくさんありますし、その他にも、個人制作のSP盤もあります。こちらの京都市立芸術大学のような大学機関や、先ほど申し上げたレコード館、

金沢の蓄音機館、東京にあります日本遺族会の昭和館などにも沢山のSP盤があります。特にレ・コード館などはSP、LP併せて76万枚もあるということです。それも、放送局の支局で不要になったものや、音楽大学からのものがどんと送られて棚にぎっしりとあり、目録の作成も困難な状況だそうです。

しかも、そうした所蔵機関は、それぞれ独自の運用をされていますので、お互いの情報交換は全く無い状態です。私共としましては、何処にどんな音盤があるのかといった情報を知るためにも、まずはSP盤収蔵先が個別に作っておられるリストを参照しながら、全部の「住所録」となるSP盤総目録を作る必要性が有ると考えたわけです。レコード会社も、コロムビアなりビクターなり、また無くなってしまった戦前のポリドール、あいはいーグルとかトンポとかヒコーキとか、ずいぶん有りまして、それぞれに追い番があって、例えばイーグルの1番から200番までが出たとしても、その200が何なのかというリストは存在しないんです。

久保田 だから全てのSP盤の住所録が必要なんですね。個々の好事家の方やコレクターの方はそれぞれのリストをお作りでしょうから、そうした情報を提供していただいて集大成すれば住所録は可能ですよね。そうしますと、この音盤はウチにしかない貴重な物だったことも判ってくると思います。

藤本 昨年、文化庁の委託を受けて、私

たちの財団で始めたんですが、政権交代の絡みもあったためか、21年度の事業として委託が決定されたのが7月の後半になってからでした。8月からようやく始めましたが、やはり時間が足らず、昨年度末の3月に報告書を財団から出す予定でしたが、全体の2割か3割位の規模での報告となる見込みで文化庁に了承を頂いています。ただ、22年度の予算申請が出来なかったものですから、今度出す報告書を元にして、23年度には、各方面のご協力を頂いて、是非この調査を継続したいと思っています。

コンピュータには閲覧者が参画するウィキペディアと言うネット辞典がありますが、そのSPレコード版のようなものをネット公開し、穴の空いているSP音源の所在を明らかにしたいと計画しています。

久保田 私共研究センターのリストも加えていただきましたね。実はまだまだ、個人からのお申し出のご相談がありますし、特定ジャンルの素晴らしいコレクターも存じ上げていますので、リストをご提供頂けるようお願いしてみましよう。こうした調査で「この音盤は誰それが持っている」ということが判るわけですから、とても有難いですね。

ところで先ほど、国会図書館に音源を納めたと仰いましたが、我々の所にも頒けて頂けるのでしょうか。

藤本 国会図書館の東京本館と関西館と子ども図書館の3つに分けて、都合4

年間に渡って、全部で約5万5千曲ほど納品する予定です。もちろん、公開が最終的な目的ですから、本と同じ扱いで、著作権の白黒をはっきりさせて、切れたものから順次公開するのが前提です。今すぐにはオンライン上の公開は出来ませんが、暫くしたら公開されるはず。商業目的ではダメですが、研究目的なら、コピーも可能になるはず。書籍と全く同じルールで公開運用の予定です。

久保田 なるほど。電子化されていない書籍ならば、取り寄せるか、遠くても所蔵している場所に行かなくてはなりません。電子化されてオンラインで繋がれば、所在さえ判れば、何処でも聞けるようになるのですから、必ずしも全てを手元に集める必要がないということですね。逆に、私共の所にしかない音源ならば、他からアクセスして来ることになるわけですから、しっかりデータ保管しなくてはなりません。ただ、予期しない災害等の事態があり得ますので、広域の複数の場所にデータを置いておくことが望ましいですね。

「伝統」を見つめ直す

久保田 ところで、藤本様は「伝統音楽」ということに関してどのようなお考えをお持ちでしょうか？

藤本 伝統音楽、特に日本の伝統音楽に関して考えますと、どうしても複雑にならざるを得ませんね。少し口はば

ったいかもかもしれませんが、日本という国がどこに行こうとしているのか、日本がどういう風になって行くべきかを考えていくということと、伝統文化を考えることは不可分だと思っています。日本人の美点として備わっていた挨拶とか、立ち居振る舞いとか言葉遣いとか、変わっていくのは仕方ないと思うのですが、先ほど申し上げましたように世界の様々な国の民族音楽に触れた拙い経験からしますと、日本ほど「日本」ということばにアレルギーのある国は珍しいと思いますね。それは敗戦とか、その後の急速な欧米化、民主主義化とか色々原因は有ると思いますが、国自体が「伝統」ということをあまり重視してこなかったことがまさに原因と思わざるを得ません。

先日アンケート調査の結果で知ったんですが、<日本の伝統的なスタイルとか芸とかを誇りに思うか>という質問に、かなりの人が「思う」と答えたんですが、実際に経験しているという人は僅か5%程度でした。

久保田 ただ、最近文科省の指導要領が変わってからは少しずつ良くなってきましね。

藤本 そうですね。音楽に関しては、昨年から「声の伝統」も取り入れるようになりましたが、それを教えられる先生がいないのではないのでしょうか。

少し、余談になりますが、私がピクチャーに入った昭和50年代は、どの企業でも海外に進出しようという機運が高まった時代で、私共の会社でも海外事

業要員養成と称する早朝講座がありました。私も第2期の要員として英語の訓練を2年間みっちり叩き込まれました。

年配のアメリカ人女性が講師だったんですが、その折に、目から鱗が落ちるような経験をしました。要するに日本人はよくペコペコするが、それは良くない。握手も手を振るのではなく、しっかり握って相手の目を見て「How do you do.」と言えばよいと教わったんです。学校じゃそんなことを教えてくれなかったんですから、もう吃驚しました。以来、世界の民族音楽の取材でよく海外に行くようになって、ずっとそうしてきました。すると何となく、自分は英語ができて国際人になったような気がしたものです。

ところが、ここ10年位前に、再び伝統音楽の仕事に戻りますと、どうもそれは違う、根本的に騙されていたのではないかと（笑）、と思うようになりました。いわゆる国粋主義からではなく、日本には日本人らしいスタイルがあるわけで、何も外国に合わせる必要など無いのでは、と思うようになりました。つまり、外国人との挨拶でも、握手ではなく姿勢を正してお辞儀をすることの美しさを日本人自身が見つめ直す時期が来たのではないかと感じたのです。こうした日本人らしい立ち居振る舞いや礼儀作法は、今でも伝統芸能の世界に息づいているわけです。

以前、三津五郎 *34 さんとお話をしていた時のことですが、日本舞踊のお

稽古では、先ず最初に礼儀と立ち居振る舞いを教えるのが基本とのことでした。日本の良い意味での生活習慣が伝統芸能によって培われ、伝えられているような気がしました。日本人は今、生活習慣においては外国人ばかりになってしまっているという危機感がありますね。そうした意味で、伝統芸能が果たす役割を大切にしたいなとも思います。

革新と古典回帰

久保田 伝統芸能や音楽などの世界での革新的な作品についてはどんな風にお考えでしょうか。例えば現代邦楽とか、スーパー歌舞伎とか…

藤本 例えば日本音楽集団のように、日本の伝統的な響きと楽器の特性を生かして新しい音楽を創っていくということは大変素晴らしいことです。クラシックにおける現代音楽創造と同じ観点とも思います。ただその手法は、西洋音楽の大きな枠組みの中にあり、日本の伝統音楽ということにだけ拘って考えますと、古典音楽とは全く別のジャンルの音楽であると思います。この頃、外国人の尺八やお箏の演奏家が沢山いらっしゃいますが、彼らが日本の伝統をどのように捉えているのかよく分かりません。私は、新しいモノを創っていくという方向の良さと、昔からある古典の世界の良さの両方を同じように伸ばして行って欲しいのですけれど、伝統音楽を聴かずに育った方々がほと

んどと言って差し支えない今の世の中では、古典だけではうまくいかない部分もあるようです。

先日若い世代の邦楽演奏家たちと話していてヒントがあったんですが、30年ほど前は若い演奏家達が集まると、ロックやポップスと一緒にやろうと言うことになり、そちらの方面に進出した人たちもたくさんおられました。この頃は反対に、古典の良さを大事にしたいという気持ちが強いようでした。時代の流れの中で、日本の本来持っている良さを大事にしたいという気持ちが、ここまで来て初めて出てきたような気がしますね。

久保田 確かに、先端的な現代邦楽の演奏家でも、結局、古典に帰る傾向がありますね。ほとんどの人が「古典をもっとしっかり勉強したい」と言ってますね。創作の分野でも、1960年代からブームになったようないわゆる超現代的な斬新な現代邦楽の流れとはちょっと違った傾向の、どこか古典の色合いが滲み出る作品で良いモノが出てきていますね。

藤本 もっとも、こちらの所長でいらした廣瀬先生のように、洋楽畑の素晴らしい作曲家の邦楽作品にはそれぞれ個性ある良い作品があるわけですが、誤解を恐れずに申しますと、日本の楽器それぞれの響きの特性を素材として創られた音楽は少し前までで、これからは、伝統音楽が内包している音の流れをより重視していく傾向があるようで、それもひとつの古典への回帰と捉えら

れるように思えます。

東京に居て感じる伝統のあり方などと比べ、京都ですと、例えばギョウコナーのようなところが身近にあって、観光資源としても伝統的なモノを積極的に活用しようという機運があるのではないのでしょうか。京都という町自体が伝統をベースにしていますね。その点、全国からの「移民」が暮らしてる東京とは事情が違ってきます。東京にも伝統的なモノがたくさんあるのですが、積極的にそれを活用しようという気持ちは京都ほど強くないですね。

久保田 でも、古典芸能の催しなど、東京で、ちょっと時間が出来たから覗いてみよう等と思っても、いつも満席で、切符も買えないんですよ。関西でしたら、当日行っても必ず入れますよ。

藤本 それは、無理して行かなくても、いつでも見られるという気持ちが有るんじゃないのでしょうか。

話は外れますが、先日大阪の文楽劇場へ伺って知った事なんですが、この頃の若い大夫さんとかお三味線の方達は、昔のプライベート録音も含めた古い録音やSP音源を聴いて参考にしていくということでした。それを聞いて、記録を残していくことの重要性を改めて再認識した次第です。私どもの財団などは本当に微力ですが、常に30年、50年後の視点で現在を振り返り、今録るべきものを録っていく、ということをしていきたいです。同時に歴史的音源も残していくようにしたいと、つくづく思う次第です。

久保田 私共の大学も、いよいよ、2012年度から法人化される予定ですが、そうしたアーカイブに特化した部署を、たとえば御社と提携など出来ればいいですね。実は私の夢なのですが、伝統芸能に特化した総合資料館を創りたいと思っています。文献資料はじめ重要な公演記録や楽譜、パンフレット、勿論歴史的な音や映像資料などを集めて、ここに来れば何でも分かる、或いは来なくても、ここにアクセスすれば分かるという機関を創りたいんです。

藤本 出来ればそこに専用ホールも有って、研究者も常駐していて、ということなら理想ですね。

久保田 実は、京都の「創生」計画で、国立のそういう機関を京都に誘致しようという案が浮上してしまっていて、勉強会もし、アピールし始めているんですが、何しろこういうご時世ですから、難しいですね。でも、芸能の発信地である京都だからこそ、そういう事に意味があると思うんです。御社も是非ともお力添えをよろしくお願いします。

藤本 素晴らしいことですね。せひ、一緒に頑張らしましょう。

久保田 よろしく申し上げます。今日はお忙しい中、貴重なお時間とお話を有難うございました。

注

- * 1 野上彰 (1909 ~ 67) : 徳島市出身。京都帝大法学部、東京帝大文学部を経て日本棋院での囲碁誌の編集長歴任。詩、小説、童話、戯曲、訳詞などの創

作活動に入り、戦後は芸術前衛運動を推進。放送劇主題歌作詞や台本、オペレッタの演出等多彩なジャンルで活躍。オリンピック賛歌の和訳でも有名。

- * 2 團伊玖磨 (1924 ~ 2001) : 東京出身。蘇州にて客死。作曲家・随筆家。随筆「パイプの煙」、オペラ「夕鶴」は有名。
- * 3 中田喜直 (1923 ~ 2000) : 東京出身。「小さい秋みつけた」「めだかの学校」など歌曲、童謡の作曲で知られる。
- * 4 大中恩 (1924 ~) : 東京出身。合唱曲や子供のための歌曲を作曲。「おなかのへる歌」「さっちゃん」などが有名。
- * 5 日本音楽集団 : 1964年創立の邦楽器演奏集団で、現代邦楽を中心に活動。
- * 6 野坂恵子 (1938 ~) : 東京芸大卒の箏曲家。現在は母の名・野坂操壽を襲名。三木稔の協力で20弦箏を開発。後独自の25弦箏も開発。古典にも強い。
- * 7 宮田耕八郎 (1938 ~) : 日本音楽集団幹部。尺八奏者で作曲家。
- * 8 「小曲集」: 宮城道雄 (1894~1956) の童謡感覚で弾ける箏曲の手解き曲集。
- * 9 平野健次 (1929 ~ 94) : 東京大学出身の国文学者で、邦楽研究家。多岐に亘るが、特に地歌箏曲研究で知られる。
- * 10 ウニャ・ラモス Una Ramo : アンデスの民族音楽奏者。特にケーナの名手。
- * 11 砂崎知子 (1942 ~) : 生田流宮城系箏曲家。プリマ的存在。
- * 12 藤本壽一 : 作・編曲家、音楽プロデューサー。巨大野外空間で行うスケタルの構成演出家としても著名。自身構成のLPアルバム「台湾原住民族の音楽」(ビクター)が芸術祭大賞受賞。
- * 13 岸邊成雄 (1912 ~ 2005) : 東洋音楽学者。日本における民族音楽学、比較音楽学を確立。東京大学名誉教授。
- * 14 阿部桂子 (1900 ~ 96) : 名古屋系生田流を習得後東京で九州系の川瀬里子に師事し、九州系の重鎮として活躍。

- 人間国宝の藤井久仁江（1933～2006）は娘。
- * 15 吉川英史（1909～2006）：邦楽研究の権威。宮城道雄記念館長。文化功労者。当センター2代所長吉川周平の父。
 - * 16 小林玉枝（1911～85）：九州系地歌箏曲家。加藤柔子・川瀬里子に師事。
 - * 17 井上道子（1913～2003）：九州系地歌箏曲家。長谷系の川瀬里子他に師事。
 - * 18 中能島欣一。（1904～84）：山田流箏曲中能島家4代家元・作曲家。人間国宝。
 - * 19 宮城喜代子（1905～91）：箏曲家宮城道雄の養女。人間国宝。
 - * 20 高橋榮清（二世。1901～89）：山田流箏曲家元。初世の長女。
 - * 21 米川敏子（初代。1913～2005）：姫路出身。箏曲家・米川琴翁の娘。人間国宝。ロシア文学者米川正夫、人間国宝初代米川文子の姪。
 - * 22 島原帆山（1901～2001）：広島出身の都山流尺八奏者。人間国宝。
 - * 23 須山知行（1918～2009）：宮城道雄の内弟子を経て、夫人の中島警子と共に大阪で宮城作品を普及。両師とも大阪音楽大学名誉教授。
 - * 24 中島警子（1926～）：宮城系箏曲家。
 - 須山知行夫人。
 - * 25 協会：京都に本部を置くNPO法人日本尺八協会。流派を越えて斯道の普及と国際交流に努める。
 - * 26 楽会：都山流尺八の祖中尾都山孫・四世中尾都山を代表とする財団法人。
 - * 27 竹本津大夫（四世。1916～87）：豪放な語りで有名な文楽の太夫。人間国宝。
 - * 28 三世荒木古童（1879～1940）：琴古流尺八中興の祖である先代の長男。
 - * 29 福田栄香（初代。1887～1961）：九州系地歌の長谷幸輝の弟子。荒木古童に嘱望されて、上京して活躍。
 - * 30 吉田晴風（1891～1950）：熊本出身の琴古流尺八家。新日本音楽の名付親。宮城道雄の協力者として知られる。
 - * 31 初代越野栄松（1887～1956）：山田流山木派の箏曲家。人間国宝。
 - * 32 小泉文夫（1927～83）：屈指の民族音楽学者。東京芸大在職中に癌で他界。
 - * 33 伊十郎（七世芳村。1901～73）：現在八世を数える長唄の唄方の名称。特に七世は名人の誉れ高い。人間国宝。
 - * 34 三津五郎（十代目坂東。1956～）歌舞伎役者。江戸守田座座元の直系。

町田佳聲のこと

山田 智恵子

2009年度から「町田佳聲の三味線音楽研究 三味線音楽の通ジャンルの音楽様式研究へ向けて」というテーマで共同研究を開催している。町田佳聲(1888-1981)は、音楽学者で、近世邦楽や民謡の研究で名高いが、有名な「チャッキリ節」の作曲など作曲活動も行った多才な人だ。その町田の三味線音楽研究の足跡を辿り、今後の三味線音楽研究の活性化に向けての方向性を探るといふ意図で、共同研究を行っている。町田は一人でいろいろな三味線音楽を研究したが、現在は、ジャンルごとに分かれてそれぞれ個別に研究しているので、なかなか通ジャンルの視点は持ちにくい状況にある。専門化が進んだ結果といえはいえなくもないが、いろいろなジャンルに手を出して、批判されるのが怖いこともあるだろう。だから後塵を拝する我々は、一人では恐れ多いから束になってかかろう、みんなで渡れば怖くないと思ったわけである。

町田は明治21年(1888)群馬県伊勢崎に生まれた。生家は現在も残されているが、醤油業であったという。群馬県立前橋中学校に入学したが、半年ほど病気療養のため休学している。同級生に詩人の萩原朔太郎がいた。明治40年、東京美術学校(現東京芸術大学美術学部)図案科に入学した。学業のかたわら、常磐津、

清元、新内、長唄、うた沢という三味線音楽を稽古した。しかし、在学中に結核で入院し、眼底出血のため美術の道を断念する。復学後、独学で五線譜を学び、邦楽の採譜を試みたという。当時、純正調オルガンで有名な田中正平(1862-1945)の邦楽研究所や東京音楽学校邦楽調査掛で、各種の邦楽を五線譜に採譜して研究しようという流れがあったが、町田はその頃両者とも接触をもっておらず、どのようにして独学で学んだのか、興味深い。

大正2年美術学校卒業後、時事新報社に記者として入社、美術を担当する。しかし結核が再発し、1年あまりで退社し、邦楽の稽古と研究に専念した。その後、中外商業新聞社(現、日本経済新聞社)に演芸記者として入社、さらに東京放送局(現NHK)に入局し邦楽番組を担当したが、いずれも途中で囑託となり、結局十年あまりで退社している。当時東京に住んでいた人は皆そうであったのかもしれないが、関東大震災と戦災という二度もの災いにも遭っている。病気や災害により、度々志や仕事を中断すると、普通の人には参ってしまうだろうが、町田のすごいところは、病気療養中にも必ず何かしているところだ。それが、後々研究成果に結びついている。

戦後も一度急性肺炎で危篤状態だった

が、ペニシリンで助かったらしい。昭和26年から東京芸術大学の常勤講師となるが、すでに還暦を過ぎており、昭和34年には停年退職する。しかし、昭和30年代以降は、『日本民謡大観』の出版や、レコードアルバムなどの業績が次々と目の目を見て、数々の賞も受け、(社)東洋音楽学会の会長にも選任された。結局昭和56(1981)年、93歳で亡くなった。これほど病弱だった割には、長命だったと思う。

こうした町田の足跡を見ると、逆境にいたると思った時に何をするかで大きく違ってくるのだと自戒をこめて思う。町田は病弱に加えて、大学という研究者にとって恵まれた環境で研究していた期間もわずかだった。邦楽社という出版社の社長業という自前の稼ぎで生活と研究を続けていた期間が長い。また、大正時代から研究用として買い集めていた歌舞伎錦絵を売って、民謡調査の旅費と経費にあてたこともあったという。経済的にも肉体的にも辛い時期が長かったはずなのに、どんな状況にあっても途切れない町田の好奇心と持続力や行動力には感服する他ない。

私が町田に思い入れを強くしたのは、伊勢崎市に調査にいき、町田の生家も見て、町田の自筆原稿を目の当たりにしたからだ。夥しい数の鉛筆書きによる五線譜楽譜や、ページごとに細かく書き込みがされた『近世邦楽年表』4冊など、コピーなどという便利なものがなかった時代、手間をいとわず、せっせと書きに書いたと思われた。五線譜楽譜などは、切れっ端状態のものも多く、町田の頭のな

かでは整理されていたのだろうが、他の人間から見れば、その楽譜が後の『三味線声曲における旋律型の研究』へとどう繋がっていくのかわからないものも多い。町田は、本当に実践的で実証的なタイプの研究者であり、その収集した多くの事例をもとに、頭のなかで構築していた様子が見て取れた。人から聞いた知見では満足できなかったし、自分で納得しないと気が済まなかったのだろう。民謡研究においてフィールドワークは今の時代当たり前であるが、三味線音楽研究においても、自身長唄の演奏家でもあり、常磐津、清元、新内、うた沢は稽古もし、習わなかった種目はその種目の多くの演奏家と知り合いとなり、まさにフィールドワークによって得た通ジャンルの認識だったことを実感した。だから研究が実を結ぶまで長い時間が必要だったが、病弱だった町田に神様が長い寿命をくれたのだろう。

私は義太夫節の研究をしているが、方法論は町田と同じく五線譜採譜によって、その音楽様式を認識してきた。『三味線声曲における旋律型の研究』において、町田は「義太夫節など上方の三味線音楽を、当時東京で研究することに苦労が多かった」と序文で記しているが、結局義太夫節の譜例が一番多いのが私には驚きだった。町田は、障害が多いほど燃えるタイプかもしれない。見習いたいなどと思っても出来るわけもないが、今個人的に厳しい状況にある自分にとって、町田という人物は励ましとなる研究者である。

研究レポート1

プロジェクト研究・共同研究の報告

平成21(2009)年度

〈プロジェクト研究A・継続〉

音楽・芸能史における芸術化の諸問題

研究代表者：後藤静夫

共同研究員：石山祥子（日本学術振興会特別研究員）、今田健太郎（本センター特別研究員）、上田学（立命館大学大学院）、奥中康人（大阪大学大学院招聘研究員）、川村清志（札幌大学准教授）、笹川慶子（関西大学准教授）、笹原亮二（国立民族学博物館准教授）、澤井万七美（国立沖縄工業高等専門学校准教授）、末松憲子（人と防災未来センター専門員）、竹内有一（本センター准教授）、竹原明理（大阪大学大学院）、龍城千与枝（早稲田大学大学院）、寺田詩麻（共立女子大学非常勤講師）、寺田真由美（本センター特別研究員）、土居郁雄（国立文楽劇場）、廣井榮子（大阪教育大学他非常勤講師）、細田明宏（帝京大学准教授）、真鍋昌賢（大阪大学助教）、横田洋（大阪大学総合学術博物館研究支援推進員）

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターにおける、2005年度から2007年度の3年間にわたる「近代日本における音楽・芸能の再検討」プロジェクトでは、音楽・芸能にとって「近代」とはいかなる時代であり、音楽・芸能はどのように「近代」に対応してきたかを検討した。

本プロジェクトでは、それらの検討を下敷きとして、音楽・芸能の「芸術化」の諸問題を、消滅し或いは「芸術化」しなかった事例も含め、議論・検討してゆく。

その際、前プロジェクトの視点に加え、音楽・芸能の歴史叙述、関係者の言説、研究史等の再検討も行う。必用に応じて「前近代」の事例も取り上げたい。

（なお、開催場所は特に断らない限り、京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター合同研究室2である。）

●第1回研究会

2009・05・17（日） 発表：上田学（コメンテーター：横田洋）「初期映画興行のデータベース化をめぐる」

発表：細田明宏（コメンテーター：後藤静夫）「近代における浄瑠璃の読み方と解釈について」

●第2回研究会

2009・06・20（土） 発表：竹原明理（コメンテーター：細田明宏）「生人形の生々しさをめぐる性と不気味」

発表：ゲストスピーカー・畑中小百合（コメンテーター：真鍋昌賢）「戦後農村のやくぎ芝居をめぐる」

●第3回研究会

2009・07・19（日） 発表：澤井万七美（コメンテーター：今田健太郎）「水也田吞州の琵琶講談」

発表：真鍋昌賢（コメンテーター：龍城千与枝）「寄席芸・速記本・レコード—吉田奈良丸論にむけて」

●第4回研究会

2009・10・03（土） 発表：笹原亮二「芸能あるいは民俗芸能と芸術・伝統、そして近代を巡って」

発表：真鍋昌賢「大衆文化論のなかの「大衆芸能」：1950年代—福田定良論のきっかけとして—」

●第5回研究会

2009・10・29（木）早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、発表：ゲストスピーカー・中尾薫「謡本の記譜法改訂の意義—研究序説にかえて」

解説等：中尾薫「能の資料紹介とディスカッション」

解説等：寺田詩麻「歌舞伎資料の紹介とディスカッション」

●第6回研究会

2009・10・30（金）早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、展示「新派展—館蔵品でたどる新派120年の歴史」閲覧とディスカッション

解説等：上田学・横田洋「連鎖劇・映画資料の紹介とディスカッション」

●第7回研究会

2010・01・24（日） 発表：石山祥子「黒川能・演目争奪戦の再検討」

発表：ゲストスピーカー・柿田肇（コメンテーター：末松憲子）「『宝塚』とは誰のものか—1930年代後半の動向を中心に—」

●第8回研究会

2010・02・28（日）大阪大学豊中キャンパス文学研究科本館大会議室、発表：上

田学（コメンテーター：横田洋）「興行外外部における初期の映画観客層—愛国婦人会の事例から—」

発表：ゲストスピーカー・阪井葉子（コメンテーター：寺田真由美）「戦後西ドイツのフォーク・フェスティバルと伝統歌謡復興」

〈プロジェクト研究B・継続〉

歌と語りの言葉と“ふし”の研究

—日本伝統音楽研究の視点と方法

研究代表者：藤田隆則

共同研究員：上野正章（大阪大学招聘研究員）、内田順子（国立歴史民俗博物館助教）、遠藤徹（東京学芸大学准教授）、奥中康人（大阪大学招聘研究員）、小塩さとみ（宮城教育大学准教授）、金城厚（沖縄県立芸術大学教授）、久保田敏子、後藤静夫、薦田治子（武蔵野音楽大学教授）、近藤静乃、島添貴美子（富山大学講師）、Sylvain Guignard（大阪学院大学教授）、田井竜一、竹内有一、細川周平（国際日本文化研究センター教授）、山田智恵子

日本の伝統音楽の諸種目の多くが、歌詞をもった音楽（いわば声楽）であるが、声楽の研究にはあまり焦点が当てられない。この背後には、学問の制度上の問題がある。歌詞の研究者（主に国文学）は、歌詞の内容解釈を優先させるため、形式の研究は当然後回しになろう。一方、音楽の研究者（音楽学）も、音楽を自立したシステムとして解釈する営みを中心に

置こうとすると、言葉のない音楽を中心にせざるをえない。「音楽」という語が伝統的に器楽をさしてきたことも背景にある。

言葉に「ふし」が生成するメカニズムの研究の大切さが学問上で認識されていないわけではない。今から30年さかのぼる1970年代まで、言葉と歌(speech and song)の境界をめぐる問いは、一般音楽学でも主流の問いのひとつだった。また、日本においても数は少ないものの、同じ関心にもとづいた、言葉のアクセント・拍節研究が行われてきた。こうした先達のまなざしや試みにふれつつ、一般音楽学の問いに立ち戻ることには、日本伝統音楽研究の固有の対象が何かを見定め続けるためにも意味があるだろう。

●第1回研究会

日時:2009年6月13日(土)12-16時(新研究棟7階合同研究室)

内容:島添貴美子:歌詞とふしの相互作用試論、丹羽幸江:謡における装飾法「あつかい」の明治以降の変化

●第2回研究会

日時:2009年10月12日(月)12-16時(新研究棟7階合同研究室)

内容:題目立のふしつけ上の特徴(参加者全員討論)

●第3回研究会

日時:2009年11月8日(日)12-16時(新研究棟7階合同研究室)

内容:伏見稲荷の御神楽の構成とふしつけの特徴(参加者全員討論)

●第4回研究会

◇日時:2010年1月23日(土)13-17時(新研究棟7階合同研究室)

内容:金城厚:ふしの形成と言葉の役割

◇日時:2010年1月24日(日)13-17時(新研究棟7階合同研究室)

内容:薦田治子:語り物のフシの生成一平家を中心に

●第5回研究会

◇日時:2010年2月20日(土)13-17時(新研究棟7階合同研究室)

内容:河東節の伝承をたどる一町田佳聲「三味線声曲における旋律型の研究」の河東節譜を事例として一山彦千子(ゲスト)お話:吉野雪子(山田研究会との合同)

◇日時:2010年2月21日(日)13-17時(新研究棟7階合同研究室)

内容:馬淵卯三郎(ゲスト):歌い換え(umsingen)をつうじて創造へ

●第6回研究会

日時:2010年3月25日(木) / 26日(金)12-16時(新研究棟7階合同研究室) 内容:出版の打ち合わせ(全員)

〈共同研究C・継続〉

ヤタイの祭りと囃子

研究代表者:田井竜一

共同研究員:安達啓子(日本女子大学教授・日本美術史)、網干毅(関西学院大学教授・音楽学)、入江宣子(仁愛女子短期大学非常勤講師・民俗音楽学)、岩井正浩(神戸大学名誉教授・音楽人類学)、植木行宣(元京都学園大学教授・日本芸能文化史)、垣東敏博(福井県立若狭歴史民俗資料館学

芸員・民俗学)、後藤静夫(センター教授・芸能史)、土居郁雄(国立文楽劇場・芸能史)、東條寛(四日市市立図書館副館長・民俗学)、永原恵三(お茶の水女子大学教授・音楽学)、西岡陽子(大阪芸術大学教授・民俗学)、八反裕太郎(颯川美術館研究員・日本美術史)、樋口昭(埼玉大学名誉教授・日本音楽史)、福原敏男(日本女子大学教授・歴史民俗学)、増田雄(歴史学)、米田実(甲賀市役所市史編纂係・民俗学)

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターで実施した、共同研究「山車囃子の諸相」(2000年度)・「ダシの祭り」と囃子の諸相」(2001 - 2002年度)・「祇園囃子の源流に関する研究」(2004 - 2006年度)を継承する形で、全国に分布するヤタイの祭りと囃子に焦点をあてて設定されたのが、本共同研究である。「芸屋台」・「囃子屋台」・「ダンジリと太鼓屋台」を大きな柱として、ヤタイの祭りと囃子の諸相について、様々な角度からの考察・議論をおこなっている。

今年度を実施した共同研究会は、以下の通りである(開催場所は特記しない限り、いずれも京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1ないしは2)。

●第1回研究会

2009年4月25日(土)、テーマ「丹波の曳き山・囃子屋台と囃子 兵庫編 その2: 味間二村神社祭礼と囃子」、(1) 久下正史氏(神戸大学大学院国際文化学研究科学

術推進研究員、ゲストスピーカー)「味間二村神社祭礼と囃子」、(2) 総合討論

●第2回研究会

2009年5月30日(土)、テーマ「掛川祭り一祭礼と囃子」、(1) 大竹宣夫氏(ゲストスピーカー)「掛川大祭の特徴とその魅力・見所」、(2) 総合討論

●第3回研究会

2009年6月13日(土)、テーマ「城端曳山祭りの諸相」、(1) 西岡陽子「城端曳山祭りの風流～概要と変遷～」、(2) 樋口昭「城端曳山祭り『庵歌』」、(3) 総合討論

●第4回研究会

2009年7月4日(土)、テーマ「近世祇園祭りの練り物」、(1) 八反裕太郎「近世祇園会の練り物について―新出資料の重山文庫蔵『祇園ねり物づくし』の紹介をかねて―」、(2) 総合討論

●第5回研究会

2009年12月12日(土)、テーマ「秩父祭りと秩父屋台囃子」、(1) 大島純子氏(ゲストスピーカー)「秩父祭りと秩父屋台囃子」、(2) 総合討論

●第6回研究会

2010年2月13日(土)、(1) 福原敏男「江戸祭礼の唐人囃子」、(2) 総括討論

〈共同研究D・新規〉

胡弓の受容と現在

研究代表者: 竹内有一

共同研究員: 井口はる菜(滋賀大学非常勤講師)、上野暁子(大阪大学博士後期課程)、加納マリ(武蔵野音楽大学講師)、

神戸愉樹美(国立音楽大学講師)、笠原(菊信木)洋子(當道音楽会)、久保田敏子、後藤静夫、野川美穂子(東京芸術大学講師)、山田智恵子

2008年度共同研究「胡弓の源流と受容—東西交渉の視点を中心に—」を振り返り、積み残したいくつかの課題についての研究と、元禄期以降の受容についての歴史的研究(文献、絵画)を行う。現在の伝承との接点も視野に入れる。また、昨年度共同研究の成果のとりまとめの作業も行う。なお、両年度胡弓関係共同研究の成果は、センター紀要およびwebの伝音アーカイブズ等を活用して公開およびその準備を進めている。

●第1回

2009年6月17日(水)14:00-17:00、合同研究室1、テーマ「研究の目的と課題—2008年度共同研究をふりかえって—」、(1)今年度の課題について(竹内・加納)、(2)研究報告:神戸「胡弓とrabeca—ソフトとしてのキリシタン起源説」、(3)研究短信・情報交換:『便船集』(1669跋刊、俳諧の語彙集)にみえる「小弓」「和琴」など、『紫の一本』の胡弓の記述について、ラベイカに「羅面琴」なる漢字をあてたのは誰か?、地歌曲にみえる「さんたまりあ」等の詞章について

●第2回

2009年8月5日(水)10:00-20:00、805研究室ほか、テーマ「年表のデータ作成作業」加納・神戸・竹内

●第3回

2009年9月9日(水)14:00-17:00、合同研究室1、テーマ1:研究発表「図像資料に見る三曲合奏」野川、テーマ2「2008年度共同研究の成果公開の準備状況について—年表データの編集作業の進捗、東洋音楽学会大会2009沖縄で報告すること—」加納・神戸・竹内

●第4回

2009年11月22日(日)15:00-20:00、国立音楽劇場会議室ほか、テーマ1「文楽の胡弓」ゲストスピーカー:鶴澤燕三、コーディネイター:後藤、テーマ2「キリシタン文書の検校関係記事を読む」神戸

●第5回

2009年12月25日(金)13:00-20:00、大阪市中央区大手前集会所ほか、テーマ「胡弓の伝承と現在—菊津木昭氏にきく—」、芸談:菊津木昭(ゲストスピーカー、胡弓演奏家)、コーディネイター:井口・笠原

●第6回

2010年1月28日(木)、10:00-20:00、合同研究室2ほか、テーマ1「『胡弓に関する年表—16~17世紀—』(仮称)の原稿の検討作業」全員、テーマ2:講演「キリシタン関係文書について—琵琶法師についての記載事例など—」五野井隆史(ゲストスピーカー、東京大学名誉教授)

●第7回

2010年3月8日11:00-20:00、9日10:00-20:00、合同研究室2、テーマ1「『胡弓に関する年表—16~17世紀—』(仮称)の原稿の検討作業」全員、テーマ2「17世紀の胡弓描画から読み取れる音楽的情報」ブ

レゼンテーター：加納、コメンテーター：徳丸吉彦（ゲストスピーカー、聖徳大学教授）・野川、テーマ3「天正狂言本と御伽草紙にみられる『こきふ』について」上野

〈共同研究E・新規〉

**町田佳聲の三味線音楽研究
—三味線音楽の通ジャンルの
音楽様式研究に向けて—**

研究代表者：山田智恵子

共同研究員：大久保真利子（大阪芸術大学大学院芸術研究科研究員）、小塩さとみ（宮城教育大学准教授）、蒲生郷昭（東京文化財研究所名誉研究員、日本大学芸術学部非常勤講師）、久保田敏子、竹内有一、龍城千与枝（早稲田大学大学院）、廣井栄子（相愛大学非常勤講師）

三味線音楽は、三味線伴奏の声楽曲という大きな枠組みはあるものの、多くの種目に分かれている。それぞれの種目において研究者はいるが、三味線音楽以外のジャンルに比べて多いとはいえない。ましてや、いろいろな種目にわたって、三味線音楽全般を見渡したような研究は最近ほとんど見ない。研究方法においても、音楽そのものを扱いその構造や特徴を抽出するというような研究は、最近少なくなっているといってよい。その原因として考えられるのは、三味線音楽は、一部を除いて、大半が歌詞のみを記した詞章本しかないため、旋律について論じるには、何らかの方法で視覚化しなければ

ならないことであろう。たとえば、西洋音楽の記譜システムである五線譜を使って採譜することなどがあるが、採譜は、音楽学の研究者の共通認識を得やすい反面、その客観性が疑問視されることも多い。とすれば研究者は、労多くして、客観的科学的でないと批判される恐れのある方法をとりにたくないのは人情だろう。従って三味線音楽の音楽面を研究しようとするとき、今でも必須文献となっているのは、町田佳聲（1888-1981）の五線譜楽譜による「三味線声曲における旋律型の研究」（1982年『東洋音楽研究』第47号所収）である。

明治二〇年代以降、いろいろな三味線音楽を五線譜に採譜する活動は行われたが、その流れには遅れて、五線譜採譜を独習したという町田が、どのようにしていろいろなジャンルの三味線音楽研究を行ったのか、「三味線声曲における旋律型の研究」の検討を通して、探っていく。検討の過程で、町田の遺品調査を行い、伊勢崎市文化観光課所蔵の町田遺品資料のなかに、「三味線声曲における旋律型の研究」の自筆原稿を見出すことができた。これにより、今後の研究の進展が期待できるようになった。

この共同研究は、町田の研究を通して、彼が三味線音楽研究を志した大正期から昭和三〇年代ごろまでの、三味線音楽研究の諸相を浮かび上がらせることにより、今後の通ジャンルの三味線音楽研究の進展と活性化に寄与することを目的とする。

今年度で開催した研究会は、以下のと

おりである。場所はいずれも日本伝統音楽研究センター合同研究室 1 である。司会・進行は研究代表者が行った。

●第 1 回研究会

平成 21 年 5 月 31 日（土）13 時より 17 時まで

- (1) 研究会開催の趣旨とメンバー紹介
- (2) 町田佳聲の思い出：稀音家義丸（ゲストスピーカー、長唄演奏家）
- (3) 機関誌版「三味線声曲における旋律型の研究」編集の立場から：蒲生郷昭
- (4) 次回の内容・日程調整

●第 2 回研究会

平成 21 年 8 月 29 日（土）13 時より 17 時まで

- (1) 「三味線声曲における旋律型の研究」長唄譜例 機関誌版・謄写版比較検討結果：大久保真利子・小塩さとみ
- (2) 町田の長唄研究：稀音家義丸（コメンテーター、ゲストスピーカー）
- (3) 次回の内容・日程調整

●共同研究のための資料調査

- (1) 平成 21 年 10 月 5 日（月）日本民謡協会蔵町田遺品調査：竹内有一・山田智恵子
- (2) 平成 21 年 10 月 22 日（木）、23 日（金）伊勢崎市経済部文化観光課蔵町田遺品調査：山田智恵子

●第 3 回研究会

平成 21 年 11 月 21 日（土）13 時より 17 時まで

- (1) 日本民謡協会・伊勢崎市経済部文化観光課蔵町田遺品調査報告：山田智恵子
- (2) 「三味線声曲における旋律型の研究」

義太夫節譜例 機関誌版・謄写版・自筆版比較検討結果：廣井栄子・山田智恵子
(3) 次回の内容・日程調整

●第 4 回研究会（2 日間）

平成 22 年 1 月 9 日、10 日

共同研究会のための資料作成作業部会：大久保真利子、龍城千与枝、山田智恵子

●第 5 回研究会（3 日間）

◇平成 22 年 2 月 18 日（木）13 時より 17 時まで

研究会のための資料作成作業部会：大久保真利子、龍城千与枝、山田智恵子

◇平成 22 年 2 月 19 日（金）12 時より 18 時まで

- (1) 町田の初期三味線音楽研究雑誌掲載論文の紹介：竹内有一
- (2) 「三味線声曲における旋律型の研究」小唄・端唄・うた沢・俗曲譜例版比較検討結果：寺田真由美
- (3) 「三味線声曲における旋律型の研究」河東節譜例 版比較検討結果：大久保真利子・山田智恵子

◇平成 22 年 2 月 20 日（土）12 時より 17 時まで（14 時より 17 時まで東洋音楽学会西日本支部第 247 回定例研究会と共催）
テーマ「河東節の伝承をたどる—町田佳聲『三味線声曲における旋律型の研究』の河東節譜を事例として」
構成・司会 山田智恵子

- (1) 河東節の伝承：吉野雪子（国立音楽大学非常勤講師・ゲストスピーカー）
- (2) 河東節について実演とお話：山彦千子（重要無形文化財河東節演奏者、ゲストスピーカー）、吉野雪子、共同研究会メンバー（聞き手）

研究レポート 2

非常勤講師の研究報告

平成 21 (2009) 年度

家塚智子

「中世京都の社会と芸能」

今年度は、昨年度の研究課題の成果を、学会にて研究報告、論文発表を行うとともに、さらに視野を広げ、「中世京都の社会と芸能」というテーマで研究を進めた。

まず、2008 年度第 4 回公開講座「幸若舞に能の源流をみる—中世芸能の伝承と復元〈敦盛〉—」の際に行った研究報告「曲舞から「幸若舞」へ」の成果を踏まえて、「曲舞から「幸若舞」へ」という論文を執筆した。本稿は、『国文学 解釈と鑑賞』2009 年 10 月号 特集 中世芸能研究の視界（ぎょうせい、2009 年 10 月）に掲載された。同誌は、「中世芸能」に関する特集号である。他の執筆者の方の論文を拝読して驚いたことは、「幸若舞曲」はもちろんのこと、現在福岡県みやま市瀬高町に伝承されている「大江の幸若舞」について、関心が非常に高かったことである。公開講座「幸若舞に能の源流をみる—中世芸能の伝承と復元〈敦盛〉—」は、画期的な企画であったと改めて認識した。

また、伝音センターでは、一般社会人を対象として連続講座を行っている。そのうちのひとつ、でんおん連続講座 D「中世京都の芸能空間—文献史料・絵画史料から読み解く—」を担当した。武家政権である室町幕府が、関東の鎌倉から京都

に根拠地を移したことにより、京都の都市空間は大きな影響を受けた。全国から武士たちが京都に住むことになり、これまでとは異なった価値観、美意識が生み出された。このような歴史的な流れを追いつつ、京都を舞台に新しく生まれ、練り広げられた芸能・文化の諸相について、毎回テーマを設定して、講義をすすめた。主に古代末から近世初頭に記された公家や武家の日記や、『洛中洛外図屏風』などの絵画史料を用いて、特に室町時代の京都で享受された様々な芸能・文化と、当時の人々の暮らしとの関わりについて講義をした。本年度の研究課題とも関連しており、これまでの研究史を整理するとともに、新知見を加えることもでき、実は私自身が一番勉強になった。

ほかに研究報告、論文執筆は以下の通り。

2008 年 4 月 4 日、第 354 回戦国史研究会例会（於駒澤大学）において、「室町幕府の年中行事—同朋衆の役割を中心に—」と題し口頭発表を行った。本報告をもとに、「室町幕府の年中行事—同朋衆の役割を中心に—」という論文を執筆した。本稿は、日次紀事研究会編『年中行事論叢—『日次紀事』からの出発—』（岩田書院、2010 年 3 月）に掲載された。『年中恒例記』など『群書類従』所載の武家故実書を中心に、日記等の一次史料の裏付けを行っ

た上で、室町幕府の年中行事における同朋衆の役割について、考察したものである。あわせて、観世大夫、田楽、琵琶法師などの芸能者たちが、将軍と対面する際の手続きや場所が異なる点なども指摘した。

2009年10月9日、藝能史研究会例会(於キャンパスプラザ京都)において、「同朋衆の系譜—同朋衆成立以前の遁世者—」と題し口頭発表を行った。室町時代、室町将軍家周辺には、多くの阿弥号を名乗った人びとがおり、各分野で活躍したことは、つとに知られている。なかには室町文化の一躍を担っていたものもいた。猿楽の観阿弥・世阿弥・音阿弥、庭者の善阿弥、そして、同朋衆の能阿弥・芸阿弥・相阿弥が、その一例である。室町幕府の職掌は、6代将軍足利義教期に整ったと言われており、同朋衆の職掌も義教期に成立したということ、かつて指摘したことがある。それでは、こうした同朋衆の職掌は、当時たくさんいた阿弥号を名乗っていた人びとのどの部分を取り込んで成立したものであるのか。この点の解明を試みた。3代将軍足利義満の頃に登場する幕府の倉を管理をする式阿弥・金阿弥らについて注目した。

なお、本センターの研究課題とは直接は関係ないが、中世京都の社会と茶屋の役割を考察した「中世京都の茶屋の機能と展開」を、2009年9月12日に、(社)部落解放・人権研究所歴史部会9月例会(於(社)部落解放・人権研究所)で行った。

また、2009年9月26日・27日、京都

国立博物館で開催された「公開国際セミナー 東アジアをめぐる金属工芸—地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究—」(トヨタ財団研究助成「中・近世の金属工芸品の製作と受用にみる江南、嶺・湖南、瀬戸内の地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究」・研究代表 久保智康氏・京都国立博物館)において、「室町時代における唐物の受容—同朋衆と唐物—」という題目で報告をした。

◇関連する口頭発表

- *2008年4月4日 「室町幕府の年中行事—同朋衆の役割を中心に—」 第354回戦国史研究会例会、於駒澤大学
- *2009年9月12日 「中世京都の茶屋の機能と展開」(社)部落解放・人権研究所歴史部会9月例会、於(社)部落解放・人権研究所
- *2009年9月26日・27日 「室町時代における唐物の受容—同朋衆と唐物—」 公開国際セミナー 東アジアをめぐる金属工芸—地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究—(トヨタ財団研究助成「中・近世の金属工芸品の製作と受用にみる江南、嶺・湖南、瀬戸内の地域特質と相互文化認識、交流媒体の研究」・研究代表 久保智康氏) 於京都国立博物館
- *2009年10月9日 「同朋衆の系譜—同朋衆成立以前の遁世者—」 藝能史研究会例会、於キャンパスプラザ京都
- *2009年11月18日 「「道々の輩」めぐって」(財)世界人権問題研究センター研究第2部前近代班、於(財)世

界人権問題研究センター

◇関連する執筆（論文）

- *「曲舞から「幸若舞」へ」『国文学 解釈と鑑賞』2009年10月号 特集 中世芸能研究の視界（ぎょうせい、2009年10月）
- *「室町幕府の年中行事—同朋衆の役割を中心に—」日次紀事研究会編『年中行事論叢—『日次紀事』からの出発—』（岩田書院、2010年3月）

◇関連する執筆（その他）

- *「同朋衆について」『歴史と地理 日本史の研究』2009年9月号（山川出版社、2009年9月）
- *「芸能史の書棚 松岡心平編『『看聞日記』と中世文化』『藝能史研究』187号（2009年10月）
- *「古代・中世に遡る同和問題の歴史」（『京都新聞』2009年12月10日朝刊、人権口コミ情報）

今田健太郎

「芝居の陰囃子とサイレント映画の
和洋合奏の比較」

本研究は、サイレント映画の伴奏音楽の取りあげ、物語の上演における音楽的演出という観点から、その特徴を歌舞伎やその他の伝統芸能などと比較して導き出そうとするものである。当年度において、前年度より引き続き調査を進めていたが、他方でいくつかの偶然から派生した課題が明らかになり、それにも取り組むこととなった。

本研究の意義については、すでに前年度の所報で述べたものから大きな変更はない。というのも、短期間の調査でまとまった成果のあがるものではなく、あえてまとめるとすれば、経過報告、あるいは付随する小さな成果の開示にとどまるからである。その理由を資料と調査方法に求めることができるのだが、ここではそれについて述べておきたい。

サイレント映画の上演における音楽的演出を明らかにする資料となりうるのは、どの場面でもどのような音楽を演奏するかを指示した「付帳（あるいはキッカケ帳）」と呼ばれるものである。個別の音楽の楽譜も重要だが、課題に直接関わるのは、その音楽がどのような場面と関係づけられたのかという点である。それにはまず付帳を手に入れて、それをフィルムや梗概とつきあわせて検討するか、あるいは上演を録画したものから音楽とそれを演奏する場面を読み取って、付帳を類推することになる。

そうした付帳は、部外者が容易に閲覧できるものではない。とくに現在、サイレント映画を上演している調査先は、伴奏音楽がサイレント映画の時代から伝承されていることを売りにしていて、興行的な利害と結びついているからである。それを模倣するのはさほど難しくはないので（それゆえ細々とながら伝承できてしまう）、実演者以外に付帳と楽譜の流出するのを恐れるのは当然といえよう。もちろん上演を録画することについても同様である。

それゆえ、自らが伴奏楽団のメンバー

として上演に参加することで付帳を閲覧する、という調査方法をとっている。付帳と楽譜が関係者の目に触れることとなるのは上演の機会にかぎられるから、そのときに記録をとらせてもらうのである。そして実際の上演において、現場でのアドバイスや、録画や録音でこれまでの演奏例、歌舞伎などの隣接芸能を見聞きしたことを考慮しながら演奏する。自らの試行錯誤を資料としているのである。

こうした調査方法に対して、主観や現行の習慣の入る余地が多く、当時の再現にはならないという批判がなされるかもしれない。たしかにそのとおりである。ただし、付帳というものの自体、伴奏楽団への指示をあますところなく述べた設計図ではないし、どのようなはたらきを意図しているかを述べた能書でもない。そこから厳密に再現しようとしても、上演においては必要な事柄にはそこに記されていないものの方が多いためである（「付帳」という語はもともと「覚え」とか「メモ」を意味していた）。付帳が上演におけるどのような状況を考慮して作られたのか（弁士、映写速度、楽器編成など）、さらには上演における暗黙の条件（上演をみている人々の期待など）など、上演を補う事柄を仮に想定する必要がでてくる。いわゆる「演奏習慣」と呼ばれるものである。

こうした想定は、できるだけ裏付けをとるようにするものの、究極的には類推の域をでるものではない。たしかに主観的と言われてしまえばそれまでである。とはいうものの、上演のルーティンにお

ける付帳の役割と限界を知ることがなければ、付帳とそこに記されていることを過大あるいは過少に評価してしまうことになるだろう。その意味で言えば、現在の調査方法は、付帳をもとにした当時の再現を目標に掲げつつも、それを疑似体験することによって、サイレント映画の上演に関わるさまざまな条件を洗い出すという試みであるといったほうがいいかもしれない。

さて、今年度はサイレント映画が伴奏楽団付きで上演される機会が、下記のとおり5回ほどあった。実はそのような機会は失われつつあり（採算がとれないのだ）、ここ数年は年に2～3回程度であるから、当たり年だったということができる。回数が多ければ多いほどそれだけ経験を積むことができ、実演者としては非常にありがたい。おかげで上演のルーティンが理解できるようになり、付帳と楽譜の位置づけと実演者の職分が明確になってきた。

ただ研究者としての立場から言えば、付帳と楽譜を自由に閲覧する機会がこれしかないのだから、もっと多くの機会を求めたいところである。上演される演目にかぎられるので、一度の機会に収集できるのは1～2つの演目にすぎない。また人気の演目の再演が続いて、レパートリーが増えないこともある。はじめに述べたように、短期的な調査でまとまった成果がだせないのはこうした点に依っているのである。

ところで今年度は、こうしたサイレント映画の伴奏音楽以外の研究対象と関わ

ることになった。きっかけは2つある。まず前年度の所報にもあるとおり、テレビ番組において書生節を解説する機会があり、それを受けて伝音セミナーにおいて書生節を取りあげたこと、もうひとつは、伝音センターにおいて「近代における諸芸・雑芸の音楽的エッセンス」という連続講座を、同じ特別研究員の寺田真由美と受け持つことになったことである。ここで、十数年前の卒業論文のさいにとりあげた「書生節（あるいはバイオリン演歌、初期演歌ともいう）」という芸能を再検討し、現在の関心とつながる課題をいくつか見いだすことになった。

そのひとつに「囃子ことば」がある。書生節はその初期から、民謡の囃子ことばを用いて、そこに擬音的な合の手ではなく、意味のとおり歌詞をあてはめて、詠嘆や悲憤慷慨、あるいは諦観をあらわそうとする。これによって囃子ことばが囃子ことばではなくなり、別のなにかに変質しているのであるが、これを検討するなかで、その変質が歌舞伎の陰囃子がサイレント映画の伴奏音楽に移行したさいの変質と相似するのではないかという仮説に思いいたった。そういえば「囃子ことば」というもの自体、うたうという行為に対する音楽的演出としてとらえることができるものでもある。まだ仮説の段階であるが、「囃子ことば」の検討をとおして、物語を上演するさいの音楽的演出という問題圏を深化させることができるかもしれない。

◇関連する著作活動

- * 論文「歌舞伎の下座囃子と無声映画の和洋合奏をを比較する」『近代日本における音楽・芸能の再検討』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2010.03

◇関連する口述活動

- * 2009.04.17-07.31 でんおん連続講座「近代における諸芸・雑芸の音楽的エッセンス」日本伝統音楽研究センター
- * 2009.09.03 伝音セミナー「書生節にきく流行歌の近代化」日本伝統音楽研究センター
- * 2010.01.30 東洋音楽学会西日本支部第246回定例研究会「絵解きと音楽をめぐって」京都教育大学サテライト
- * 2010.02.12 国際ワークショップ 歴史的音盤のアーカイブ「民博所蔵日本コロムビア外地録音資料とそのアーカイブ状況について」国立民族学博物館

◇関連する演奏活動

- * 2009.08.02 「畑儀文「声の匠」第2回活動弁士と浅草オペラ（石屋川・神戸酒心館）」にて、サイレント映画の伴奏楽団のバンドマスターとして、《血煙高田馬場》を上演
- * 2009.10.01 「船堀映画祭（タワーホール船堀）」にて、サイレント映画の伴奏楽団のバンドマスターとして、《キートンの警官騒動》を上演
- * 2009.10.03 「最明寺（川越）」にて、サイレント映画の伴奏楽団のバンドマスターとして、《血煙荒神山》《血煙高田馬場》を上演
- * 2009.12.12 「継ぐこと・伝えること 42

活動写真弁士（烏丸・京都芸術センター）」にて、サイレント映画の伴奏楽団のバンドマスターとして、『右門捕物帳六番手柄』を上演

*2009.12.19 「上方書生節協会 第3回今甦る書生節～演歌師がヴァイオリンをもった！（四ツ橋・フィドル倶楽部）」にて、ゲストとして書生節について実演と講演

*2010.03.25 「センゲキシネマズ（飯田）」にて、サイレント映画の伴奏楽団のバンドマスターとして、『血煙高田馬場』を上演

寺田（大谷）真由美
「寄席および花柳界における
三味線小歌曲の特質」

先年度の研究課題であった「三味線小歌曲と他の音楽・芸能との関連性」の成果をふまえ、本年度は「寄席および花柳界における三味線小歌曲の特質」をテーマとし、寄席における音曲芸の作曲上の創意工夫や特異性、そしてジェンダーの問題に着目した。その結果、女性特有の音曲芸である「女道楽」や、俗曲《吹き寄せ》および浄瑠璃のパフォーマンス上の特質などを明らかにすることができた。なお、本報告書では三味線小歌曲とは端唄、小唄、うた沢、俗曲のジャンルの総称とする。

色物席と呼ばれる寄席では、落語（噺）の合間に音曲や手品、紙切り、太神楽な

どの諸芸（この諸芸を色物という）を織り交ぜた高座で客を楽しませる。その色物席にあって、三味線音楽が中心の音曲を演じる芸人には比較的女性が多い。女性の社会進出が現在ほど進んでいなかった明治～大正期の色物席にあって女性活躍が目立っていた。男性中心の噺家の合間に高座を彩った彼女らは、まさしく「高座の花」であった。もちろん芸は二の次で容色ばかりを売りにした者もいたであろうが、残された録音からは彼女らの芸がたんなる落語の添え物やにぎやかではなく、高度な技量を持っていたことがわかる。

色物席における女性独特の音曲芸として「女道楽」がある。女道楽とは女性から数人で高座で歌や踊りを演じる芸であり、合間合間に軽口を挿んで笑いを誘ったり、ちょっとした色気を振りまいたりといったところに寄席らしさがあった。明治～大正期には稲の家連、春本連、隆の家連などの女道楽グループが人気を博したものの、大正末期頃からは人気は衰退し、漫才に吸収されていった。昭和40年代頃まで活躍していた「最後の女道楽」といわれた千家松人形、お鯉（生没年等は現在調査中）は、俗曲の一つである《吹き寄せ》をLPレコードに残している。その録音には、人形お鯉が三味線を弾きながら長唄、新内、常磐津、端唄、都々逸、民謡などを歌い、曲の合間には軽口を入れて次曲へとつないでいく…という女道楽の典型がみられる。ただし、華やかに聞こえるよう三味線の手数を増やす、聴かせ所の合方部分を繰り返す、など高

座映えする工夫が随所にうかがえる。

この《吹き寄せ》は明治～大正期の寄席ではしばしば演じられた演目で、人形お鯉の例にも見られるように、種々のジャンルの歌や語りものなどから一、二句ずつ抜き出し、パッチワークのように寄せ集めて一つの曲にしたものである。東京ではこのような音曲を「吹き寄せ」、「五目」と呼び、上方では「ほこりたたき」と呼んだ。また、《吹き寄せ》は音曲の芸としてだけではなく噺家の踊りにもいわれ、下座（囃子）に《吹き寄せ》を弾き歌いしてもらい、その曲に合わせて高座で踊り分けた。《吹き寄せ》の要は、曲と曲、つまりあるジャンルから別ジャンルへのつぎ目がわからないようになめらかに移行しつつも、それらのジャンル感や特徴は失わせないことにある。名人とうたわれた女性芸人立花家橘之助（1868-1935）の《ほこりたたき》（橘之助は主たる活躍の場が東京であったために《吹き寄せ》ではなく《ほこりたたき》の呼称を用いていたようである）は、天衣無縫ともいえる曲間のつぎ目のなさに加え、数句ずつ抜き出された歌詞もむやみな列挙ではなく、縁語や掛詞のように関係する語を次曲に配する工夫がなされている。曲にも歌詞にも二重三重の仕掛けがほどこされた《吹き寄せ》は、洒脱さ、遊び心があふれた寄席にふさわしい曲であろう。

さらに、現在の寄席ではほとんど聞かれなくなった浄瑠璃の芸において、劇場で演じられる浄瑠璃とは異なる点があげられる。明治期、大正期の色物席は庶民

にとって音楽を手軽に楽しむことのできる場の一つであった。当時は現在とは比較にならないほど多数の浄瑠璃の太夫や三味線方がおり、彼らの一部は寄席出演にも気軽に応じていたようである。このような劇場に出演する男性の地方だけではなく、女性の太夫、三味線方も寄席出演をしていた。そのため劇場に足を運ばなくても、サワリくらは寄席で耳にすることができた。

幼少より常磐津を常磐津金蔵に師事した女性芸人宝集家金之助（1860-1928）は、いくつものSPレコードに常磐津を録音しており、その音源と劇場で演じられている常磐津とを比較すると大きく二点の相違がいえ。まず一点は、合方部分の曲弾き化である。合方はもともと三味線の独奏部分であるが、金之助はそれを全く異なる合方に作り替え、自らの三味線技術が映える曲弾きとし、ほんの十数秒の合方を2～3分の三味線のパフォーマンスとして演出している。なお、全ての常磐津曲に対してそのような曲弾き化を行っているわけではないことは付言しておく。二点目は、歌詞の地口化、風刺化である。これは金之助の例ではないが、常磐津《将門》の有名なサワリである「嵯峨や御室」を「サバや大魚（おおうお）」などと「魚尽くし」に作り替えて演じるものがある。

以上のように、色物席の音曲芸では既成の曲を演じる場合でもさまざまな創意が行われていることが指摘できた。「女道楽」といった寄席独自の興行形態はもちろんのこと、劇場などで聞かれる浄瑠璃

や長唄との差異、いいかえれば客がそれらを寄席で享受するメリットをどのようにアピールするかが、音曲芸の特異性となる。そして、パフォーマンス上の工夫だけではなく、洒落のめした地口や、その時々々の時勢や風俗を敏感に反映、風刺させた歌詞作りは、音曲の技術だけではない芸人のセンスそのものを問われるものだといえる。

◇関連する研究発表等

*2009.04.17-07.31 (全10回) 市民講座

「でんおん連続講座：近代における諸芸・雑芸の音楽的エッセンス」、日本伝統音楽研究センター

*2009.12.03 講演「伝音セミナー：女性による寄席の音曲芸」、日本伝統音楽研究センター

*2010.03.31 論文「明治期の見立番付にみる寄席の音曲師の芸態」『京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告5 近代日本における音楽・芸能の再検討』後藤静夫編、日本伝統音楽研究センター

催事レポート 1

公開講座

平成 21 (2009) 年度

平成 21 年度第 1 回 (通算第 25 回)

祇園祭り 南観音山の囃子

構成・司会・解説：田井竜一

日時：2009 年 5 月 16 日 (土) 午後 2 時
～ 4 時、場所：京都芸術センター フ
リースペース

出演：財団法人南観音山保存会囃子方
お話：木村正之氏 (財団法人南観音山保
存会常務理事)、鈴木昌和氏 (南観音山
囃子方代表)

共催：京都芸術センター

内容：祇園囃子と南観音山
祭りを伝える一百足屋町と祇園祭り
囃子の解説とデモンストレーション
お囃子体験コーナー

囃子の実演

配布資料：解説レジュメ、アンケート用
紙

趣旨 (チラシより)：

京都の祇園囃子をご紹介するシリーズ

の第 3 弾として、南観音山の囃子を取り
あげます。囃子方の方々をお招きし、囃
子の曲目や楽器の奏法などについての詳
しい説明や、デモンストレーションも交え
ながら、その魅力に迫ります。また、実
際に囃子を体験していただけるコーナー
もあります。南観音山の囃子の素晴らし
さを、じっくりとご堪能いただければと
思います。

報告：

京都芸術センターとの共催で、祇園囃
子を紹介するシリーズも、今回で第 3 回
目となる。本講座でも、南観音山の囃子
の特色を、担い手の解説やデモンスト
レーション、実演等で、一通りしめすこ
うができたとかんがえる。

特に今回は、今までの実績をふまえ、
担い手の方々のご協力もえて、写真パネ
ルやプロジェクターを使用してのよりわ
かりやすい説明、「お囃子体験コーナー」
の設定などの工夫をこころみ、参加者に



より親しみをもってもらえることができた。

今後も、京都芸術センターと共催で、担い手に話をじっくりとききながらすすめる、レクチャー・デモンストレーションの形式で、京都の民俗芸能を紹介するシリーズを実施していければとおもう。



平成21年度第2回(通算第26回)
落語・音曲・芝居—創作和風味遊辞歌謡
『らくだ』に見る芸能の交流

構成・司会：山田智恵子

日時：2009年6月27日(土)14時～16時、
場所：ウィングス京都イベントホール、
受講料1000円、参加者200名

内容：

- (1) 講演 関山和夫(佛教大学名誉教授)
- (2) 対談と実演

中川桂(二松學舎大学文学部専任講師)

林家染雀(落語家)

吉川絹代(お囃子・三味線)

笑福亭呂竹(お囃子・鳴物)

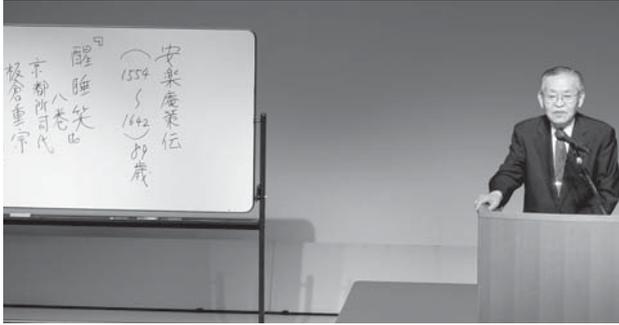
- (3) 上演：創作和風味遊辞歌謡『らくだ』

花柳瞳一(手斧目の半次)

花柳寛十郎(紙屑屋久六)

清元延柳(作曲・演奏)





内容報告：

落語・音曲・芝居というと、一見してばらばらなものが並んでいるように見えるが、これらの芸能は昔から互いに深い関わりをもっていた。その相互交流の様子を、落語の側からと音曲・芝居の側の両面から見ていこうとする企画である。

まず、落語のような話芸の成り立ちについて、説教・話芸研究の関山和夫氏が講演を行った。落語などの話芸の源には仏教があるという関山氏の説に、多くの受講者が首肯していた。

つづいて落語が音曲・芝居といかに深

く関わっているかについて、落語・寄席芸能研究者の中川桂氏と落語家林家染雀氏による対談が行われた。出身大学が同じお二人による、漫才さながらの対談となった。中川氏作成資料「らくだの系譜」「上方落語と音曲・芝居」（当日のパフレット）に基づいて行われたので、わかりやすく面白い上に、しっかりした裏付けのある対談であった。つづいて、染雀氏により各種の出囃子などの紹介と、音曲囃「七段目」の実演が行われた。会場は大いに沸き返った。

休憩を挟み、音曲の側から、落語を取





り入れた事例として、創作和風ミュージカル「らくだ」を上演した。この作品は、東條歩作詞・清元延柳作曲により1988年に初演された新作である。立方の舞踊家二人が、三味線音楽家と掛合で、歌い踊り演ずるというまさに抱腹絶倒のミュージカル「らくだ」であった。盛りだくさんな内容であったが、学生の受講も多かった。日頃西洋音楽を専門とする若い人々にも、日本の芸能の面白さを実感してもらえたのではないかと感じた。

平成21年度第3回（通算第27回）

芸能における笑いと遊び心

構成・司会・解説：久保田敏子



日時：平成22年3月6日14時～16時

場所：京都芸術センター講堂

料金：前売=3,000円（当日=3,500円）、

学生=1,500円（但し本学学生は無料）

報告：

この公開講座は、京都市の「五感で感じる和の文化事業」の一つに組み込まれ、京都市立芸術大学創立130周年記念のプレ事業として協賛の名の下に、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター設立10周年記念、および京都芸術センター開設10周年記念公演として開催した。なお京都芸術センターでは、連続講座の〈継ぐこと・伝えること〉の第43回講座を兼ね、当センターでは本年度の第3回公開講座を兼ねる催事として行った。

プログラムは以下の通りである。

(1) 挨拶・解説 久保田敏子

(2) 講演「芸能における笑いと遊び心」

林家染丸

—休憩—

(3) 創作地歌「五臓六腑」

三弦本手：池上眞吾

三弦替手：菊央雄司

(4) 古典地歌「勤行寺（こんきょうじ）」

富山清琴（人間国宝）

(5) 舞踊「そばやの三ッ面」

立方：若柳吉蔵

地方：（浄瑠璃）常磐津一佐太夫

常磐津都代太夫

（三味線）常磐津都喜蔵

常磐津都史

囃子：藤舎名生社中

解説（5のみ）：竹内有一



趣旨（チラシより）：

芸能において私たちが面白がらせるエッセンスはどこにあるのでしょうか。能、歌舞伎あるいは文楽など、近世以前に確立して専用劇場にておこなわれる芸能では、さまざまな角度から面白さを見いだすことができます。

それに対して、寄席や大道など劇場の外においておこなわれた雑多な芸能では、面白いエッセンスは数少なくても、それを先鋭化させることで人々の気をひくものが数多くありました。それらはまた、素人でも工夫すれば演じることのできるアクセスのよさがあることから、セミプロの参加や宴会芸への展開をとまっています。

この連続講座では、音楽的に面白がらせるエッセンスにしたがって、近代の諸芸・雑芸を読み解いていきます。これは過去と同時に現在の芸能を観察、評価する目を養うことにもなると考えます。

平成 21 年度連続講座 C

能をよりよく鑑賞するための、
音楽演出面のポイント

講師：藤田隆則

日時：平成 21 年 10 月 7 日～12 月 9 日の
全 10 回、10 時 40 分～12 時 10 分

会場：日本伝統音楽研究センター合同研究室 1

趣旨（チラシより）：

室町初期に成立した能は、現在でもよく演じられています。1 時間以上の長さの力のこもった演技をよりよく受けと

めるためには、鑑賞のポイントありかをしっかりと意識しておくことも大切です。

この講座では、一番の能の音楽演出面のポイントを、10 回にわたって解説します。鑑賞歴は長くても、なかなかわかった気にならないと感じておられる方、ぜひ受講してください。

平成 21 年度連続講座 D

中世京都の芸能空間

—文献史料・絵画史料から読み解く—

講師：家塚智子

日時：平成 21 年 10 月 7 日～12 月 9 日の
全 10 回、13 時～14 時 30 分

会場：日本伝統音楽研究センター合同研究室 1

趣旨（チラシより）：

武家政権である室町幕府が、関東の鎌倉から京都に根拠地を移したことにより、京都の都市空間は大きな影響をうけました。全国から武士たちが京都に住むことになり、これまでとは異なった価値観、美意識が生み出されました。こうした歴史的な流れを追いつつ、京都を舞台に新しく育まれ、練り広げられた芸能・文化の諸相について、毎回テーマを設定して、講義をすすめていきます。

主に古代末から近世初頭に記された公家や武家の日記や、『洛中洛外図屏風』などの絵画史料を用いて、特に室町時代の京都で享受された様々な芸能・文化と、当時の人々の暮らしとの関わりについて、明らかにします。

催事レポート3

伝音セミナー
日本の希少音楽資源にふれる—SP盤にきく幻の音
平成21(2009)年度

平成21年度伝音セミナーは、引き続き「日本の希少音楽資源にふれる—SP盤にきく幻の音」シリーズを行った。このシリーズも4年目となり、内容は多岐にわたってきた。第一木曜日の午後という時間帯にも係わらず、また京都市内といっても決して交通の便はよくない当センター合同研究室での開催にも係わらず、毎回参加して下さる受講者もおられ、このセミナーが市民の間に定着してきたのが感じられた。またホームページの案内をご覧になって、かなり遠方から参加して下さる方もあり、担当者としては有り難く思うと同時に、社会に発信することの責任も強く感じた。さらに、セミナーの内容を補完するため、展覧ギャラリーと連動した回もある。耳できくだけでなく、目でも見るといふ日本伝統音楽や芸能のありようを、一部ではあるが感じて

もらえたことと思う。また、平成21年度より、伝音センターの図書室が一般公開されたことにより、伝音セミナーの前後、閲覧室に立ち寄られる受講者もあった。そのため、ホームページの「図書室だより」と図書閲覧室の「テーマ図書展示コーナー」においても、セミナーの内容に関する図書の紹介を行った。

なお、この伝音セミナーは、副題に「SP盤にきく幻の音」としているが、用いた音源は必ずしもSP盤とは限らない。当センターでは所蔵していないSP盤で、CDに復刻発売されたものを用いることもあれば、昭和30年代からのLPレコードアルバムの中の貴重なもの、復刻されていないものを用いることもあった。公開という意味ももちろん大切だが、我々伝音センターのスタッフがそれぞれ音源を集中的に聞きたいという興味に基づいて



テーマを設定しているため、センター所蔵のSP盤だけでは治まりきれなくなった結果といえる。CDやインターネット配信という現代音楽産業の状況からみれば、今やLP盤も含めて、希少音楽資源、歴史的音源と考えて差し支えないだろうと思う。（企画広報委員長：山田智恵子）

日時：2009年5月～2010年1月の全8回（原則として第一木曜日）、午後2時30分より4時30分

会場：日本伝統音楽研究センター合同研究室1

参加費：無料、定員：先着50名
協力：亀村正章

○第1回 2009年5月7日（木）

ホルンボステル『東洋の音楽』をきく

構成：藤田隆則

世界の音楽を比較し、系譜や進化を考える学問、比較音楽学が誕生し発展したのは、20世紀はじめのドイツでした。その発展をうながしたのは、言うまでもなく、録音技術の存在です。当時の比較音楽学を代表する人物、ホルンボステルの監修による録音を聞きながら、アジアの大きな空間と、100年にわたる時間のトリップを楽しみたいと思います。

○第2回 2009年6月4日（木）

芝居を離れた浄瑠璃 - 新内を聴く

構成：後藤静夫

「河東袴、外記袴、半太羽織に義太股引、豊後かあいや丸裸」と狂歌にうたわれたように、宮古路豊後掾の豊後節は極めて

扇情的な語り口であったといわれます。それが江戸の心中事件流行の原因とされ、豊後節は歌舞伎出演を禁止されました。残った弟子達は歌舞伎出演を続けるため語り口を改めざるを得ませんでしたが、芝居を離れ遊里に進出した新内節には、豊後節の扇情的な語り口が色濃く残っているとされています。ここでは、新旧演者の新内を聴き、豊後節の面影を探ります。

○第3回 2009年7月2日（木）

長浜曳山祭りのシャギリをきく

構成：田井竜一

長浜曳山祭りといえば、子供歌舞伎が大変有名です。しかし、実はシャギリとよばれる囃子も、祭礼においてとても重要な役割をはたしています。ここでは、祭礼とシャギリとの関わりをかんがえると共に、新旧のシャギリの録音を聞きくらべてみたいと思います。

○第4回 2009年9月3日（木）

書生節にきく流行歌の近代化

構成：今田健太郎

レコードが登場したのと同時期に、当時の大学生＝書生たちが作って歌った流行歌が「書生節」です。彼らは立身出世を望んで学業にいそしみつつ、盛り場で遊んだり新奇なものを先取りしたりするトレンド・リーダーでもありました。そのためか、もともとは街頭に立って歌われていたその音楽に、レコード録音にも適するよう工夫した跡があります。書生節を聞いて、当時の風俗と音楽の模索をし

ていきたいと思えます。

○第5回 2009年10月1日(木)

『雅楽』を聴く

構成：久保田敏子

大正10(1921)年収録の「平安朝レコード(インベリアル)、及び昭和11(1936)年収録の「KBS(国際文化振興会)レコード」に残された雅楽諸分野の音を聞きながら、皆様を非日常的な古雅の世界に御案内します。

○第6回 2009年11月5日(木)

清元節を聴く

構成：山田智恵子

清元節は、各種浄瑠璃のなかでもっとも新しくできた流派です。その時々の時流に敏感に反応して作曲されてきたため、曲風の変化が大きいことがひとつの特徴となっています。五世清元延寿太夫らの歴史的音源を聞きながら清元節の語り口や曲のスタイルの豊かさを味わいたいと思えます。

○第7回 2009年12月3日(木)

女性による寄席の音曲芸

構成：大谷(寺田)真由美

落語や講談の合間に寄席の高座を彩る音曲芸。音曲芸は古くから女性が演じることも多く、男性の芸人が多くを占める寄席において、まさに高座の<華>でした。彼女たちの華麗な芸に酔いながら、寄席らしい音曲とは何かを考えてみたいと思えます。

○第8回 2010年1月7日(木)

『かっぽれ』の謎

構成：竹内有一

さあにぎやかに新年を祝いましょう。三味線俗曲・舞踊の中でも最も愉快な「かっぽれ」。東郷元帥の国葬に際し、某国から追悼音楽として放送されてしまったという皮肉な逸話が残ります。ルーツとなった俗謡・芸能、明治期の大流行、歌舞伎への展開、シーボルトの紹介した日本旋律との関わり等について考察します。(以上、内容説明文はチラシより抜粋)

専任教員の活動報告

平成 21 (2009) 年度

(平成 20 年度補遺を含む)

久保田 敏子

●著作活動

- * 2009.04.05 随想『『楽報』一千号に寄せて～都山流尺八楽会とのご縁と思いで出～』、『楽報』都山流尺八楽会刊
- * 2009.04.19 解説：三橋検校「雪月花」、菊原琴治「秋風辞」、三つ橋勾当「松竹梅」、光崎検校「千代の鶯」、芝居歌「石橋」、『地歌箏曲演奏会』琴友会主催、国立文楽劇場（公演自体は主催者の事情により中止）
- * 2009.05 ～ 2010.03 論考：奇数隔月連載、松浦検校「宇治巡り」、峰崎勾当「越後獅子」、吉沢検校「秋の曲」「千鳥の曲」、湖出市十郎「黒髪」、藤永検校「八千代獅子」、『創明』創明音楽会刊
- * 2009.05.17 論考：『長谷検校と九州系地歌 (8)』、長谷検校記念第 15 回くまもと全国邦楽コンクール冊子
- * 2009.06 ～ 2010.02 論考：偶数隔月連載、菊岡検校「長等の春」、芳沢金七・若村藤四郎「石橋」、八橋検校「乱輪舌」、石川勾当「融」、継橋検校「難波獅子」、『楽報』都山流尺八楽会刊
- * 2009.06.04 論評：「第 46 回なにわ芸術祭＜新進舞踊家競演会＞講評」サンケイ新聞朝刊文化欄
- * 2009.06.20 解説：須山知行「箏合奏協奏曲」、峰崎勾当「越後獅子」、菊岡検校「磯千鳥」、宮城道雄「夢殿」「道灌」、大阪新音主催第 37 回『宮城道雄をしのぶ箏の夕べ～須山知行師追惜演奏会～』、いずみホール
- * 2009.06.20 論文：「祭文から音頭へ～その源流と変遷～」、『秋篠文化「特集大和の祭文音頭～江州音頭・河内音頭の源を探る～」』第 7 号、秋篠音楽堂運営委員会刊
- * 2009.06.21 解説：八橋検校「みだれ」、菊武祥庭「限りなき喜び」「巖の乙女」、松浦検校「末の契」「若菜」「玉の台」、不詳「四段砧」、菊岡検校「儘の川」「長等の春」、光崎検校「夜々の星」「千代の鶯」、峰崎勾当「吾妻獅子」「越後獅子」、三つ橋勾当「根曳の松」、芳沢金七・若村藤四郎「石橋」、『祥門会勉強会』、当道友楽会主催、国立文楽劇場小ホール
- * 2009.07.03 資料：「琵琶の音楽～その誕生と系譜～」、『京都アスニー連続講座』配付資料
- * 2009.08.05 解説：二世清元梅吉「曾我菊（尾花末露曾我菊）」、平岡吟舟「松の功」「花の心」、清元寿兵衛「義士餅」、四世清元梅吉「田螺」、東明吟舟・柳舟「獅子」「四季短歌」、CD アルバム『四世清元梅吉の世界』第 2 集、日本伝統文化振興財団、VZCG8400 ～ 1
- * 2009.08.25 解説：深草検校「名月」、岸野次郎三「古松風」、歌木検校「身替

- 音頭」、伊勢屋三保「女手前」、富崎春昇「海の幸」、CD アルバム『伝承名古屋の芸統～富成清女に於ける顕現～』DOOEM-5959、S-TWO Corporation
- *2009.09.20 論考：「地歌・箏曲の先師たち①～箏曲の流派～」、『三曲』No.98 日本三曲協会刊
 - *2009.09.30 論考：「鳥居名美野師の箏組歌～付山田流箏曲指定の箏組歌」、解説：八橋検校「雲井曲」「菜菔」「須磨」、北島検校「明石」、生田検校「雲井曲・巾の調」、北島または牧野検校「若葉」、石塚検校「花宴」、三橋検校「宮鶯」、安村検校「飛燕曲」、『鳥居名美野箏組歌第三集』VZCG-8431～2、日本伝統文化振興財団
 - *2009.10.01 資料：「歴史的音源～雅楽～」、伝音セミナー『日本の希少音源にふれる—SP 盤にきく幻の音』
 - *2009.10.15 解説：深草検校「名月」、富崎春昇「蓬生」、初代富山清琴「砧」、『富成清女地歌箏曲演奏会』プログラム、紀尾井ホール
 - *2009.10.26 解説：北嶋 or 生田検校「思川」、鳥羽屋里長原作「六玉川」、山田検校「熊野」、『萩岡松韻りさいたる～山田流歌物の流れ～』冊子、国立劇場
 - *2009.10.31 随想：『『心中天網島』の魅力』国立文楽劇場開場25周年記念、文楽平成21年度錦秋講演プログラム
 - *2009.12.01 解説：柳川流組歌「飛驒」岸野次郎三「狐会」、峰崎勾当「小簾の外」、鶴岡検校「東山」、幾山検校「打盤・横槌」、不詳「都十二月」、『地歌箏曲の楽しみ』、京都市主催第13回京都創生

- 連続セミナー、弥栄会館祇園コーナー
- *2009.12.02 資料：「三味線を知る～庶民の心を捉えた楽器～」総合演習配布
 - *2009.12.04 論考：「江戸音曲における王朝文学受容」、平安文学と隣接諸学シリーズ第8巻『王朝文学と音楽』竹林舎刊
 - *2010.01.01 論考：「襲名 福田栄香」、邦楽ジャーナル通算276号
 - *2010.01.10 解説：八橋検校「四季曲」、吉沢検校「秋の曲」、山田検校「桜狩」、邦楽技能者オーディション合格者CD「山田流箏曲鈴木真為」日本伝統文化振興財団 VZCF-1023
 - *2010.01.16 解説：八橋検校「六段調」「みだれ」、平岡吟舟「柳」、石川勾当「八重衣」、古後公隆編曲「Here There And Everywhere」「In My Life」、『野田弥生による新春邦楽の調べ』プログラム、京都コンサートホール
 - *2010.01.17 論考：「箏曲と地歌の流派と芸系について」、解説：峰崎勾当「越後獅子」、作物「都十二月」、山登松齡「四季の遊」、菊崎検校「西行桜」、作物「狸」、山田流箏曲「三番叟」、『国立三曲の会』パンフレット、国立劇場
 - *2010.02.01 論考：「葛原勾当の足跡」邦楽ジャーナル277号
 - *2010.02.13 解説：沢井忠夫「めぐりめぐる」芝居歌「十三鐘」、松村禎三「詩曲一番」、山本邦山「二管の譜」、鶴田錦史「西郷隆盛」、不詳「尾上の松」、光崎検校「五段砧」、作物「勤行寺」、熊本全国邦楽コンクール実行委員会主催『邦楽新鋭展』冊子、紀尾井小ホー

- ル
- * 2010.03.01 論考:「特集 追善富山清翁」、『邦楽と舞踊』邦楽と舞踊社刊
 - * 2010.03.06 解説:池上眞吾作曲「五臓六腑」、作物「勤行寺」、常磐津舞踊「そばやの三ッ面」、『芸能における笑いと遊び心』、芸術センター・伝音センター10周年記念共催事業プログラム
 - * 2010.03.07 論考:「四天王寺の聖霊会」、『秋篠文化<特集聖霊会>』第8号、秋篠音楽堂運営委員会刊
 - * 2010.03.28 論考:『箏曲大意抄』と箏組歌について、解説:石塚検校「花宴」、北島検校「明石」、八橋検校「雪の晨」「須磨」「心尽」、三橋検校「宮の鶯」、『第九回階箏曲組歌演奏会～流派を越えて組歌の、魅力を探る～』プログラム、洗足学園音楽大学現代邦楽研究所箏曲組歌会、紀尾井小ホール
- 口述活動
- * 2009.04.26 解説:吉沢検校「冬の曲」、楯山登「金剛石」、宮城道雄「編曲八千代獅子」「遠砧」、光崎検校「初音」「櫻川」、西山徳茂都「秋の言の葉」、菊末勾当「嵯峨の秋」、菊岡検校「梅の宿」、松浦検校「里の暁」「深夜の月」、松阪春栄「楓の花」、佐山検校「桜尽し」、『当道友楽会定期演奏会』、当道友楽会主催、サンケイホール・ブリーゼ
 - * 2009.06.20 口演:「本日の演奏と須山知行氏について」、大阪新音主催第37回『宮城道雄をしのぶ箏の夕べ～須山知行師追惜演奏会～』いずみホール
 - * 2009.07.11 解説:菊岡検校「梅の宿」「御山獅子」「今小町」「竹生島」、光崎検校

- 「初音」、三橋検校「雪月花」、吉沢検校「夏の曲」、菊塚与市「住吉詣」、作物「蛙」「尾の上の待つ」松浦検校「宇治巡り」「茶音頭」、八橋検校「八段調」、『古典を勉強する会』琴友会主催、守口文化センターエナジーホール
- * 2009.07.03 口演:「琵琶の音楽～その誕生と系譜～」、『京都アスニー連続講座』第3回、京都アスニー
- * 2009.09.19 解説:菊原琴治「秋風の」、玉岡検校「朝戸出」、歌木検校「通ふ神」、島の観七・若村藤四郎「きぎす」、藤谷勾当綾衣、玉岡検校「鶴の声」、在原勾当「浮舟」、菊島勾当「羽織袴」、八百六伊八「ひなぶり」、峰崎勾当「小簾の戸」「袖香灯」、鶴山勾当「所縁の月」「正月」、湖出市十郎「黒髪」、『胡弓勉強会』菊津木昭主催、玉水記念館大ホール
- * 2009.11.29 解説:野川流「鳥組」「下総」「紅」「飛驒組」、柳川流「琉球組」「下総細り」、「堺」、『三味線本手組歌の会』文楽劇場
- * 2009.12.02 実演と口演:「三味線を知る～庶民の心を捉えた楽器～」音楽学部総合演習
- * 2009.12.18 講義と解説:柳川流組歌「飛驒」、「狐会」、峰崎勾当「小簾の外」、鶴岡検校「東山」、幾山検校「打盤・横槌」、吉沢検校+松阪春栄「秋の曲」、『京都のお座敷音楽の魅力～地歌箏曲の楽しみ』、京都市主催第13回京都創生連続セミナー、弥栄会館ギオンコーナー
- * 2010.01.17 解説:九州系の「越後獅子」、京都柳川流の作物「都十二月」、山田流

箏曲・山登松齡「四季の遊」、中国系・菊崎検校「西行桜」、富筋の作物「狸」、山田流箏曲・河東節移曲「三番叟」、『国立三曲の会』国立劇場

- * 2010.03.19 解説：柳川検校「琉球組」、北島 or 生田検校「思川」、岸野次郎三「狐会」「里景色」、深草検校「さらし」、松浦検校「四つの民」、光崎検校「夜々の星」、『おち椿の会』えん主催、法然院本堂

●学内活動

評議員、国際交流委員会、学術交流推進委員会、将来構想推進委員会、自己点検・評価委員会、全学広報委員会、キャンパス・ハラスメント防止対策委員会、安全衛生委員会、日本学生支援機構奨学金返還免除者候補者選考委員会、創立130周年記念事業運営委員会、京都市立芸術大学芸術教育振興協会委員会委員

●社会活動

万葉古代学研究所特別研究員（平成13～21年度）、文化審議会文化財分科会第四部門専門委員会・同選定保存技術部会委員長、京都創生研究会「国立京都伝統芸能文化センター（仮称）」分科会委員、京都コンサートホール企画運営委員、京都の秋音楽祭実行委員、京都芸術センター評議員、奈良秋篠音楽堂伝統芸能企画運営委員、国民文化祭京都市実行委員会顧問、NPO法人日本の音振興普及協会副理事長、社団法人日本尺八連盟理事、京都府古典芸能振興公演補助金審査委員、京都市芸術文化特別奨励制度選考委員、京都市芸術

新人賞・功労賞選考委員、財団法人ポララ伝統文化振興財団ポララ賞選考委員、財団法人日本伝統文化振興財団邦楽技能者オーディション選考委員、社団法人日本尺八連盟主催オーディションおよびコンクール審査員、熊本長谷検校記念全国邦楽コンクール審査員

●所属学会

- * 社団法人東洋音楽学会
- * 日本歌謡学会（評議員）
- * 日本民俗音楽学会

後藤 静夫

●著作活動

- * 2009・05・08 解説「説経節と小栗判官」、「オグリ！」（宝塚歌劇 SO club 機関誌）、pp.1～5
- * 2009・06・10 提言「基本に還ること」、「『上方芸能』172号（特集 明日への文楽）、p.46
- * 2009・06・15 エッセイ「竹と文楽 1」、「竹」（竹文化振興協会会誌）第108号（竹文化振興協会）、pp.3～4
- * 2009・08・18 解説「義太夫節について」、「『文楽 義太夫節はおもしろい』（伝統音楽の魅力を探る・レクチャーコンサート Vol.5）プログラム、（京都和文華の会）、pp.4～7
- * 2009・09・15 エッセイ「竹と文楽 2」、「竹」（竹文化振興協会会誌）第109号（竹文化振興協会）、pp.6～9
- * 2010・03・15 エッセイ「竹と文楽 3」、「竹」（竹文化振興協会会誌）第111号（竹

文化振興協会)、pp.1～4

*2010・03・31 編著書：後藤静夫編『近代日本における音楽・芸能の再検討』、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 研究報告5、京都、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、206pp

*2010・03・31 論文「四ツ橋文楽座の開場と三代竹本津太夫—松竹の文楽経営の視点から」、(同上所収)、pp.19～34

●プロデュース活動

*2009・04・01 監修「[型]で観る文楽」『なごみ09年4月号 小特集』、淡交社、pp.77～85

*2009・07・25 企画・監修「伝統演劇・文楽」三業の実演と解説・講義 京都造形芸術大学通信教育部 総合教育科目 国立文楽劇場

*2009・08・18 企画・構成・解説「文楽 義太夫節はおもしろい」、京都和文華の会(伝統音楽の魅力を探る・レクチャーコンサート Vol.5)、京都府立文化芸術会館

*2009・11・01 監修「BUNRAKU」『ハーモニー』第51号(日本再発見)、トヨタファイナンス株式会社、pp.18～25

*2009・12・01 企画協力「芸大で聞く 義太夫節」音楽学部 日本音楽史の授業の一環として 本学日本伝統音楽研究センター

*2010・01・06 監修「はじめてのニッポンカルチャー 文楽」『ディスカバー・ジャパン』創刊3号、樫出版社、pp.118

～129

●講演・口述・解説活動

*2009・08・13 解説・司会「桐竹勘十郎が佐伯申人形を操る」佐伯灯籠 国指定重要無形民俗文化財指定記念事業 亀岡市稗田地区公民館

*2009・09・17 解説出演「夏祭浪花鑑・釣船三婦内の段」(『芸能花舞台』、NHK教育TV)

*2009・11・21 解説・司会「どんどろ 大師と傾城阿波の鳴門」お弓お鶴像完成除幕記念式典、空堀・どんどろ大師 善福寺

●講義・講座活動

*2009・04・26 「文楽の魅力」特別講座『ようこそ文楽の世界へ』①講師、よみうり天満橋文化センター

*2009・06・23～25 「近世人形芝居の成立とその技法、伝承」人形劇パベットアーク特別講座講師、東かがわ市とらまる人形劇研究所

*2009・07・11 「さまざまな浄瑠璃—新内の世界」文楽応援団研修会講師、国立文楽劇場

*2009・07・25 「文楽の制作他」京都造形芸術大学通信教育部 総合教育科目 講師 国立文楽劇場

*2009・08・08～09 「限界に挑む芸—文楽」放送大学面接授業講師、放送大学大阪学習センター

*2009・09・11 「文楽入門」①追手門学院 和学講座講師、追手門学院大阪城スクエア、以後②09・25/③10・09/④10・23/⑤11・13/⑥11・27/⑦12・11/⑧12・25 まで開催

田井 竜一

*2010・02・24 「歌舞伎の音楽の魅力」
ラストホール教養大学講師、伊丹市ラ
スタホール

*2010・03・17 「文楽入門」シニアシテ
ィカレッジ講師、大阪教育大学天王寺
キャンパス

*2010・03・20 「和楽器と漆」うるし椀
の会講師、天王寺・画廊舎林

●調査・取材活動

*2009・04・09 伊勢神宮 お田植祭(伊
勢) 調査

*2009・06・16 人形劇の図書館(滋賀
県大津市本堅田) 調査

*2009・06・28 能勢人形浄瑠璃月間事
業(能勢浄瑠璃シアター) 調査

*2009・07・08～10 佐渡文弥人形 猿
八座「弘知法印御伝記」公演(新発田・
新潟) 調査

*2009・10・11～12 静岡県 掛川大祭
(掛川) 調査

*2010・02・11 淡路・阿波人形浄瑠璃
公演(兵庫県立芸術文化センター) 調
査

*2010・03・05 東山 流響院 調査

●学内活動

*評議員

*芸術教育振興協会評議員

●対外活動

*京都大学地球環境学堂三才学林 運営
懇話会委員

*三重県志摩市教育委員会 安乗人形芝
居検討委員会委員 他

●著作活動

*2010.03 編著書:植木行宣・田井竜一
編『祇園囃子の源流—風流拍子物・羯
鼓稚児舞・シャギリ—』、東京、岩田書
院、590pp.

*2010.03 論文「祇園囃子の源流—風流
拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリ—」、植
木行宣・田井竜一編『祇園囃子の源流
—風流拍子物・羯鼓稚児舞・シャギリ
—』、東京、岩田書院、pp.3-69

*2010.03 論文「画像資料にきく『祇園
囃子』」、植木行宣・田井竜一編『祇園
囃子の源流—風流拍子物・羯鼓稚児舞・
シャギリ—』、東京、岩田書院、pp.513-
546

*2009.03.31 調査報告「京都祇園祭り
船鉦の囃子」、『日本伝統音楽研究』第
6号、pp.36-62

*2009.07.01 エッセイ「祇園囃子の魅力
—その歴史や調査から見えてくるも
の」、『月刊京都』2009年7月号(No.696)、
pp.36-37

●口述活動

*2009.07.02 解説「長浜曳山祭りのシャ
ギリをきく」、平成21年度上半期 伝
音セミナー「日本の希少音楽資源にふ
れる—SP盤にきく幻の音」第3回、京
都市立芸術大学日本伝統音楽研究セン
ター合同研究室1

*2009.08.29 講演「祇園囃子の魅力」、
アスニー京都学講座、京都市生涯学習
総合センター(京都アスニー)3階研
修室

●企画

- *2009.05.16 企画・司会・進行「祇園祭り 南観音山の囃子」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成21年度第1回公開講座、京都芸術センターフリースペース、京都市立芸術大学主催、京都芸術センター共催

●調査活動

- *京都祇園囃子調査
- *京都六斎念仏調査
- *坂越の船祭り調査
- *洛中洛外囃・祇園祭礼囃を中心とした祭礼囃調査

●教育活動

- *2009.04～2009.09 京都市立芸術大学美術学部非常勤講師

●対外活動

- *兵庫県文化財保護審議会委員
- *独立行政法人日本芸術文化振興会文楽劇場短期公演等専門委員会委員
- *桑名石取祭の祭車行事保存伝承委員会委員（桑名市教育委員会）
- *坂越の船祭り総合調査団調査員（赤穂市教育委員会）
- *所属学会：（社）東洋音楽学会、日本オセアニア学会、日本音楽学会、民族芸術学会

竹内 有一

●著作活動

○書籍

- *2009.12.28 共著『まるごと三味線の本』田中悠美子・野川美穂子・配川美加編、

青弓社、A5 縦組 332pp.

○逐次刊行物

- *2009.09.01 解説・歌詞・字句解釈・史料提供「秘曲・新曲サロン55 常磐津道行丸い字」、『日本舞踊』第61巻9月号、pp.24-26
- *2010.02.01 解説・歌詞・字句解釈「秘曲・新曲サロン60 長唄 旅」、『日本舞踊』第62巻2月号、pp.24-26
- *2009.12.10 時評「『でんおん』の十年—京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター」芸能ジャーナル、『上方芸能』174号、p.88

○パンフレット等

- *2009.09.01 研究発表要旨「17世紀の胡弓—半球型胴の多様性と新史料—」、（社）東洋音楽学会第60回大会プログラム、p.11
- *2009.05.16 曲目解説・演奏者紹介「地歌：雪」「箏曲：五段砧」「筑前琵琶：関ヶ原」、第25回舞踊・邦楽公演『新進と花形による舞踊・邦楽鑑賞会』パンフレット、国立文楽劇場
- *2009.10.10 曲目解説・演奏者紹介「宮籬節：桂川恋の柵—お半—」「清元節：其小唄夢廓—権八小紫—」、第148回邦楽公演『永井荷風音曲散歩』パンフレット、国立劇場
- *2009.12.20 曲目解説「常磐津節：恨葛露濡衣、常磐の老松」、『第1回常磐津都史りサイトル』パンフレット、池坊学園こころホール
- *2010.01.16 長唄正本図版提供「姿の鏡 関寺小町（錦小路文庫）、邦楽鑑賞会—長唄の会・三曲の会—」パンフレット、

国立劇場

●口述活動

- * 2009.09.11 講演「日本の伝統音楽をたどる4:近世邦楽と外来文化—唐人うた・木琴・オルゴール—」アスニーセミナー、京都アスニー
- * 2009.10.18 研究発表「17世紀の胡弓—半球型胴の多様性と新史料—」、(社)東洋音楽学会第60回大会、沖縄県立芸術大学
- * 2010.01.07 構成・解説「『かっぽれ』の謎」、平成21年度第8回伝音セミナー、日本伝統音楽研究センター
- * 2010.02.06 研究発表「『かっぽれ』の謎—ナンセンスの演出—」、国際日本文化研究センター共同研究「民謡研究の新しい方向」、国際日本文化研究センター
- * 2010.02.19 調査報告「大正初期の町田佳声の著作をめぐる—一五線譜を使用した近世邦楽研究の開拓者としての側面—」、日本伝統音楽研究センター共同研究「町田佳声の三味線音楽研究」、日本伝統音楽研究センター
- * 2010.02.20 講演「花街の伝える芸能—三味線音楽の多様性—」アスニー京都学講座、京都アスニー
- * 2010.03.06 解説「舞踊・常磐津：そばやの三ツ面」、日本伝統音楽研究センター平成21年度第3回公開講座「芸能における笑いと遊び心」、京都芸術センター

○講義・教育

- * 京都文化学基礎演習1(前期15回)、京都府立大学
- * 京都文化学基礎演習2(後期15回)、

京都府立大学

- * (2008年度補遺) 2008.12.17 特別講義「江戸庶民の世界へのまなざし—木琴・オルゴール・唐人うた—」、京都市立芸術大学音楽学部総合演習
- 共同研究
 - * 共同研究「胡弓の受容と現在」研究代表者、日本伝統音楽研究センター(詳細別掲)
 - * プロジェクト研究2件・共同研究2件、共同研究員、日本伝統音楽研究センター(詳細別掲)
 - * 共同研究「民謡研究の新しい方向」共同研究員、国際日本文化研究センター(研究代表者:細川周平)

●調査・取材活動

- * 詞章本出版物(浄瑠璃本・うた本)等の書誌調査およびデータ作成
- * 近世邦楽関連の近世版本の市場調査およびその収集・保存・公開に関わる調査
- * 歌舞伎・文楽・邦楽・日本舞踊等の公演・稽古における演奏手法や伝承実態等の調査
- * 近世邦楽に関わるSPレコード音源の書誌的調査
- * 映画に使用される近世邦楽の楽曲・演奏に関わる調査
- * 花街における音楽伝承の実態調査

●演奏活動

- * 2009.06 常磐津節「雷船頭」「七つ面」の浄瑠璃演奏、『市川海老蔵特別舞踊公演』大阪松竹座
- * 2009.06.20 常磐津節「両顔月姿絵」の浄瑠璃演奏、NHK-FM「邦楽百番」

藤田 隆則

*2009.12.20 常磐津節「恨葛露濡衣」「常磐の老松」の浄瑠璃演奏、『第1回常磐津都史リサイタル』池坊学園こころホール

*2010.01 常磐津節「道行旅路の嫁入」の浄瑠璃演奏、『初春大歌舞伎』大阪松竹座

*2010.03.25-26 常磐津節「勢獅子」「夜討曾我」「尻駕」の浄瑠璃演奏、『日本舞踊協会関西支部公演』国立文楽劇場

*随時 講義・講演等における浄瑠璃（常磐津節）の実演デモンストレーション

●委員・役職等

*第64回文化庁芸術祭執行委員会審査委員（音楽部門、関西の部）

*文化庁国際芸術交流支援事業協力者会議審査委員（伝統芸能部門）

*（社）東洋音楽学会 理事（総務、西日本支部経理）、同 第60回大会実行委員会委員

○学内

*広報委員会委員、同電子・印刷メディア小委員会委員

*情報管理委員会委員、同ネットワーク管理運営部会委員、同情報スペース運営部会委員

●所属学会等

（社）東洋音楽学会、楽劇学会、近世文学会、芸能史研究会、歌舞伎学会、国際浮世絵学会、洋学史研究会、長野郷土史研究会、関西木造劇場研究会、常磐津協会

●著作活動

*2009.10.20 単著論文「歴史史料としての口頭伝承（録音資料）—京観世の強吟」『芸能史研究』187号、pp.59-68

*2010.02 単著単行本『能のノリと地拍子—リズムの民族音楽学』檜書店、270pp

*2010.03 単著論文「能と狂言における下り羽・渡り拍子・囃子物・シャギリ—登場から退場への構造」植木行宣・田井竜一（共編）『祇園囃子の源流』岩田書院、pp.267-289

●口述活動

*2009.04.17 講演「能楽—武士の嗜みと庶民の憧れ」アスニー・セミナー 京都市：京都アスニー

*2009.05.07 音源内容解説「ホルンボステル『東洋の音楽』をきく」（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター伝音セミナー、第1回、京都市：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1

*2009.06.07 研究発表「同音という指標—日本の中世芸能におけるウタイとコトバ」日本口承文芸学会大会シンポジウム「ウタとカタリ—比較歌謡研究の現場から」奈良市：奈良教育大学

*2009.06.14 研究発表「音資料からわかることと新たな課題—謡の強吟の歴史研究をつうじて」芸能史研究会大会 京都市：同志社女子大学

*2009.07.02 研究発表 'Masculinity expressed through distortion of musical scale in singing

of Japanese Noh drama.' International Council for Traditional Music 40th World Conference. Durban, South Africa: University of Kwazulu-Natal.

* 2009.08.0 シンポジウムでの発表「日本における伝承の技術」朝日新聞・ユネスコ共同主催『無形文化遺産の未来—シンポジウムと舞台イベント』奈良市：奈良県新公会堂能楽ホール

* 2009.10 ~ 12 (毎週水曜日、全 10 回) でんおん連続講座 C 「能をよりよく鑑賞するための音楽演出面のポイント」21 年度後期 京都市：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

* 2009.10.17 小講演「日本における音楽文化、その伝統の継承について」音楽学部オープンスクール 京都市：京都市立芸術大学

* 2009.10.25 研究発表「書評、兵藤裕己『琵琶法師—〈異界〉を語る人びと』岩波新書」日本音楽学会第 60 回大会、書評の部屋 大阪府豊中市：大阪大学

* 2009.11.12/13 中学生への授業「能楽の謡、笛、太鼓—五人囃子の声と音」京都市立芸術大学出前授業 京都市：藤森中学校

* 2009.11.28 研究発表「日本の民謡の旋律における言語規範—兼常の民謡論ほかを読む」共同研究「民謡研究の新しい方向」(代表：細川周平) 京都市：国際日本文化研究センター

* 2009.12.05 シンポジウムでの発表「能楽の『文化遺産』化を問う—伝統芸能の現在」比較日本文化研究会第 14 回研究大会 大阪市：大阪市立弁天町市

民学習センター

* 2009.12.17 特別授業「能の歴史と音楽」(田中多佳子担当授業「日本音楽史」のゲスト講師) 京都市：京都教育大学

* 2010.02.09 研究発表「音楽と芸能における『伝統』『古典』観—伝統楽器の練習方法の韓日比較から」第 9 回日韓アジア未来フォーラム「東アジアにおける公演文化(芸能)の発生と現在：その普遍性と独自性」韓国、慶州市：慶州教育文化会館

* 2010.02.24 高校生への授業「日本伝統音楽—体を動かして鑑賞する」京都市立芸術大学出前授業 近江八幡市：近江兄弟社高等学校

* 2010.03.17 シンポジウムでの発表 'Tradition transmission and RCJTM' s activities.' Presentation and Workshop: Kyoto design, now and then. Leeds, UK: University of Leeds.

●調査・取材活動

* 継続中 謡曲・能の囃子の伝承にかかわる調査

●学内活動

* 附属図書館・芸術資料館運営委員会委員
* 京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師 (2009.04-2010.03)

●対外活動

* 本願寺教学伝道研究センター委嘱研究員
* 東洋音楽学会理事(機関誌編集担当)
* 早稲田大学演劇博物館客員研究員
* 神戸女学院大学音楽学部非常勤講師 (2009.09-2010.03)
* 滋賀大学教育学部非常勤講師 (2009.04-2009.09)

* 所属学会 日本音楽学会、楽劇学会、東洋音楽学会、能楽学会、音楽教育学会、芸能史研究会、International Council for Traditional Music, Society for Ethnomusicology

山田 智恵子

●著作活動

- * 2009.06.27 「開催の趣旨」京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター平成21年度第2回公開講座「落語・音曲＊芝居 創作和風味遊辞歌謡『らくだ』に見る芸能の交流」プログラム
- * 2009.12 書籍紹介「神津武男『浄瑠璃本史研究 近松・義太夫から昭和の文楽まで』園田学園女子大学近松研究所紀要第20号、pp.19-21

●口述活動

- * 2009.06.27 司会・進行「日本伝統音楽研究センター平成21年度第2回公開講座 落語・音曲・芝居 創作和風味遊辞歌謡『らくだ』に見る芸能の交流」、ウイングス京都イベントホール
- * 2009.11.05 音源内容解説「平成21年度第6回伝音セミナー 清元節をきく」、日本伝統音楽研究センター合同研究室1
- * 2009.11.21 研究発表「町田佳聲の義太夫節譜例の版比較検討結果」日本伝統音楽研究センター第3回山田共同研究会、日本伝統音楽研究センター合同研究室1
- * 2009.12.01 司会・聞き手「芸大で聴く 義太夫節 義太夫三味線の習得と演奏」

(日本音楽史Ⅱ公開特別授業)、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1

- * 2010.02.12 講演「日本の伝統音楽をたどる6 歌舞伎と文楽 庶民が楽しむ劇場音楽」、京都アスニー
- * 2010.02.19 研究発表「町田佳聲の河東節譜例の版比較検討結果」日本伝統音楽研究センター第5回山田共同研究会、日本伝統音楽研究センター合同研究室1
- * 2010.02.20 構成・司会「河東節の伝承とたどる 町田佳聲『三味線声曲における旋律型の研究』河東節譜を事例として」東洋音楽学会西日本支部第247回定例研究会・日本伝統音楽研究センター第6回山田共同研究会共催、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター合同研究室1

●プロデュース活動

- * 2009.06.27 「落語・音曲・芝居 創作和風味遊辞歌謡『らくだ』に見る芸能の交流」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催平成21年度第2回公開講座、ウイングス京都イベントホール

●調査活動

- * 2009.06.10 「六道講式」調査、比叡山横川
- * 2009.10.12 国指定重要無形民俗文化財「題目立」調査、奈良市上深川町
- * 2009.10.05 日本民謡協会所蔵 町田遺品調査
- * 2009.10.22-23 伊勢崎市経済部文化観光課所蔵 町田遺品調査

●学内活動

* 芸大サテライト運営委員会委員

* 10年略史編集委員会副委員長

* 京都市立芸術大学音楽学部非常勤講師

●**対外活動**

* 2009.12 東京芸術大学音楽学部非常勤
講師（集中講義）

* 東洋音楽学会機関誌編集委員

* 楽劇学会機関誌編集委員

* 日本芸術文化振興会第23期文楽研修講
師

* 所属学会：日本音楽学会、（社）東洋音
楽学会、楽劇学会

* 清元協会会員

彙報

平成 21 (2009) 年度

人事 採用と異動

◇平成 21 年 4 月 1 日

非常勤嘱託員 高久直子 (新規採用)

◇平成 22 年 3 月 31 日

非常勤講師 家塚智子 (任期満了)

非常勤講師 今田健太郎 (任期満了)

非常勤講師 大谷 (寺田) 真由美 (任期満了)

学術出版物

◆『日本伝統音楽研究』第 7 号

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究紀要

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2010 年 3 月 31 日、B5 2 段縦組・1 段横組 68pp.

<論文> 上野正章：明治期末の松江市における音風景について—楽隊の普及との関連から—、神戸愉樹美：胡弓と rabeca—ソフトとしてのキリシタン起源説—、<研究ノート> 齊藤尚：日野祭曳山囃子における雅楽曲の撰取について

◆『近代日本における音楽・芸能の再検討』

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告 5

後藤静夫編、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター発行、2010 年 3 月 31 日、A4 2 段縦組 206pp.

目次、第一部 近世芸能の展開 (寺田詩麻、後藤静夫、龍城千与枝、土田牧子、今田健太郎、細田明宏)、第二部 新たな音楽・芸能の生成 (奥中康人、廣井榮子、澤井万七美、横田洋、真鍋昌賢、上田学)、第三部 ジャンルと方法論の再検討 (寺田真由美、土居郁雄、川村清志)

(2006～2008 年度プロジェクト研究「近代日本における音楽・芸能の再検討」の成果)

◆DVD『国指定重要無形民俗文化財 幸若舞〈安宅〉〈敦盛〉』

出演：幸若舞保存会 (福岡県みやま市瀬高町大江)、収録日：2009 年 2 月 7 日、場所：ウィングス京都、内容：京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター公開講座より

藤田隆則企画・構成、東正子録画・制作、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター制作・発行、2010 年 3 月 31 日、ビデオ DVD1 枚

◆『日本伝統音楽研究センター 所報』第 10 号、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター編集・発行、2009 年 6 月 30 日、A5 86pp.

展 観

(1) 2009 年 9 月～ 「雅楽の楽器」

構成：山田智恵子・齊藤尚

(2) 伝音セミナー関連資料の展示

図書室

2009年度より、センター図書室に収蔵している資料の学内・学外利用者への閲覧サービス(週3日)を本格的にはじめた。学内者(学生・院生・教職員)に対しては、貸出も可能とした。これに伴い、各種の資料を収蔵する「資料室」および「楽器庫」、出納の窓口と閲覧ブース・閲覧デスク・開架資料等を設置する「閲覧室」、登録・整理・配架作業等を行う「資料管理室」、関連するwebサイト等を総称して、『日本伝統音楽研究センター図書室』と通称することとなった。業務とサービスの詳細については、webサイトを参照いただきたい。また、学芸業務・司書業務担当者が中心となって、当センターの活動や研究テーマに即した資料紹介等を行う「テ

ーマ図書展示コーナー」を閲覧室に設置し、同じ内容をwebサイト上に展開する「図書室だより」の執筆掲載をはじめた。2009年度のテーマは、第1回「祇園祭」、第2回「落語と見世物」、第3回「書生節 演歌師たちの世界」、第4回「雅楽 その1」。(資料委員長：藤田隆則)

委託研究

◇大西秀紀「センター所蔵の日本の伝統音楽LPレコードの復刻とドキュメンテーション」

センターが所蔵している日本の伝統音楽LPレコードの内、重要度の高いものの復刻作業(デジタル化)とドキュメンテーションを委託した。

(学術委員長：田井竜一)



京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 概要 2009

設立の理念

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターは、日本の社会に根ざす伝統文化を、音楽・芸能の面から総合的に研究することを目指し、2000年に設立されました。

古くから日本の地に起こり、外からの要素の受容を絶えず繰り返しつつも、独自の様相を今日に受け継いできている日本の伝統的な音楽・芸能は、日本語と同じように、日本の、そして世界の貴重な宝です。これらは、維持継承させるべきものであると共に、新しい文化創造のための源泉として発展されるべきものであり、との認識をもちます。

センターは日本の伝統的な音楽・芸能と、その根底にある文化の構造を研究し、その成果を公表し、社会に貢献するように努めます。そのために国内外の研究者・研究機関・演奏家と提携し、成果や情報を共有・交流する拠点機能の役割を果たします。

京都は1200年以上にわたって、日本における文化創造の核であり続けています。このセンターは、伝統的な音楽・芸能を中心とする研究分野で、重要な役割と使命を担い、その核になることを目指します。

主な活動内容

◆資料の収集・整理・保存

- * 文献資料（図書、逐次刊行物、古文獻、マイクロフィルムなどの複写・非印刷資料を含む）
- * 音響映像資料

* 楽器資料

* 絵画資料

* データーベースなどの電子資料

◆日本の伝統的な音楽・芸能の個別研究

* 専任教員による個人研究

* 非常勤講師（特別研究員）による特定のテーマの研究

* 外部の研究者に、その専門領域に即したテーマで委託する研究（「委託研究」）

◆日本の伝統的な音楽・芸能の共同研究

- * 国内外の多くの研究者・演奏家の参加・協力を得て、学際的・国際的な視野で、センターが行う共同研究活動（「プロジェクト研究」「共同研究」）

* センターが外部と共同して行う調査研究

◆活動成果の社会への提供

* 市民向け公開講座・セミナー等の開催

* 紀要・所報・資料集成などの学術出版物の発行

* 電子メディアによる情報発信

研究の視点と領域

- ◆伝統的芸術音楽の歴史・現状・未来をみすえる
- *明治までに成立した伝統音楽の展開と伝承
 - <古代> 祭祀歌謡と芸能（楽器等の考古学的遺物を含む）
 - <上代・中古> 仏教音楽（声明等）宮廷の儀礼・宴遊音楽（雅楽等）
 - <中世> 仏教芸能（琵琶、雑芸、尺八等）武家社会の芸能（能・狂言等）流行歌謡（今様、中世小歌等）
 - <近世> 外来音楽（切支丹音楽、琴楽、明清楽）劇場音楽（義太夫節・常磐津節等の浄瑠璃、長唄、歌舞伎囃子等）非劇場音楽（地歌箏曲、三味線音楽、琵琶楽、尺八等）流行歌謡（小唄、端唄等）
- ◆近代社会での伝統音楽の展開をみすえる
- *伝統音楽の発展とその可能性に関する事象の研究
- *伝統音楽の享受と教育に関連する事象の研究
- ◆広い視野で生活の音楽をみすえる
- *民間伝承と日本関連諸地域及び先住民の音楽・芸能の研究
- *生活における音楽・芸能（わらべうた・民謡、祭礼音楽等の民俗芸能）の研究

スタッフ

- ◆専任教員
- 所長：久保田敏子（音楽学、日本音楽史学）
「三味線音楽の変遷と楽曲研究」
- 教授：後藤静夫（日本芸能史）

- 「人形浄瑠璃文楽の実態」「近世語り物の伝承形態」「座敷カラクリ復元の諸相」
- 教授：山田智恵子（音楽学）
- 「義太夫節の音楽学的研究」「三味線音楽の通ジャンルの音楽様式研究」
- 准教授：田井竜一（民族音楽学・日本音楽芸論）
- 「山・鉾・屋台の囃子の比較研究」「六斎念仏の研究」
- 准教授：竹内有一（日本音楽史学）
- 「関西における江戸音曲の伝承」「近世・近代の京都と音楽文化の諸相史」
- 准教授：藤田隆則（民族音楽学）
- 「中世の歌と語りの作曲法」「能・狂言の演出史」「古典／儀礼音楽の伝承形式研究」
- ◆非常勤講師
- 家塚智子（特別研究員）
- 今田健太郎（特別研究員）
- 上野正章（特別研究員）
- 大谷（寺田）真由美（特別研究員）
- 東正子（情報管理員）
- ◆非常勤嘱託員
- 齊藤尚（学芸員）
- 高久直子（司書）

沿革

- 平成3年6月 世界文化自由都市推進検討委員会において、廣瀬量平委員が日本伝統音楽の研究施設の必要性を訴える。
- 平成5年3月 新京都市基本計画「大学・学術研究機関の充実」の「市立芸術大学の振興」の項で、「邦楽部門の新設についても研究する」と言及。
- 平成8年6月 京都市芸術文化振興計画「教

育・研究機関の充実」で、日本の伝統音楽や芸能を研究・教育するための体制を整えることが提唱される。

平成 8 年 12 月 京都市の「もっと元気に・京都アクションプラン」の「文化が元気」の項目に、伝統音楽研究部門の設置が位置づけられる。

平成 9 年 4 月 実施設計費及び地質調査経費 予算措置

平成 10 年 4 月 施設建設費 予算措置

平成 10 年 10 月 施設建設着工（工期 17 ヶ月）

平成 11 年 9 月 日本伝統音楽研究センター 設立準備室を設置する（室長：廣瀬量平名誉教授）。

平成 12 年 2 月 新研究棟竣工

平成 12 年 4 月 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター開設

廣瀬量平名誉教授が初代所長に就任

平成 12 年 12 月 京都市立芸術大学新研究棟完成披露式挙行

平成 16 年 4 月 吉川周平前教授が二代所長に就任

平成 20 年 4 月 久保田敏子前教授が三代所長に就任

施設

新研究棟 6～8 階（総面積 約 1,500 m²）

6 階 センター所長室、資料室、資料管理室、閲覧室、個人研究室

7 階 合同研究室 2、楽器庫、貴重資料庫

8 階 個人研究室 5、研究員室 2、視聴覚編集室、研修室 2

京都市立芸術大学

日本伝統音楽研究センター 所報 第11号

2010年6月30日発行

編集 京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター
発行者

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6

電話 075-334-2240

FAX 075-334-2241

E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp

<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

印刷所 株式会社 田中プリント

Research Centre for Japanese Traditional Music

Kyoto City University of Arts

13-6 Ooe Kutsukake-choo, Nishikyoo-ku

Kyoto-shi, 610-1197, Japan

Tel +81-75-334-2240

Fax +81-75-334-2241

E-mail rc-jtm@kcua.ac.jp

<http://www.kcua.ac.jp/jtm/>

